

古代語引用助詞研究の諸課題

——川端善明（1958）等を取り上げて——

辻 本 桜 介

1. 問題の所在と本稿の目的

橋本（1969: 131）の「奈良朝及それ以前に於て、格助詞「と」の用法は大体に於て、今日の標準語と著しい差異はない」という記述などに見受けられるように、一部に、古代語の引用助詞「と」は古代から現代までこれといった性質の変化を起こしていないと考える向きがある。橋本と同趣旨の発言は、松尾（1969: 352, 1970: 40）・内尾（1982: 76）・山口（2000: 75）にも見られる。「この語は国語史的变化が他の助詞に比べて目立たない、カブトガニを思わせるような語である」（岩下 2003: 323）というような譬えを持ち出すものもある。しかし、これらは「と」の用例をきちんと観察した上での発言とは思えない。少し用例を眺めて得た印象を綴ったにすぎないものだろう。

筆者はこれまで、古代語の引用助詞「と」「とて」「など」の用法記述に取り組み、成果を報告してきた。その中で、引用助詞に関する先行研究を可能な限り網羅的に把握するよう努めてきたが、それらを眺める限りでも、古代の「と」は色々な点で現代語と異なっていることが分かる。加えて、筆者自身の研究の中でも現代語と異なる振る舞いをする「と」の実態を多少なりと示してきた。「と」は決して、“カブトガニ”のような語ではない。文法論的に考究すべき課題は少なからず残されている。

ところが、古代語の引用助詞に関係する最近の論文を読んでいると、い

ったい何を問題としたいのか、よく分からないものが見受けられる。たとえば森脇(2010)は、竹取物語に見られる「いふやう…と」のような引用表現の用例や形式名詞「やう」の用例を集めて示し、文意の解釈を付け加えるなどしているが、何度か読み返してみてもその中に日本語学的な意義を持ち得そうな主張は特に見当たらない。鶴田(2019)は、更級日記において引用助詞「と」「とて」の後に来る述語用言を並べて示しているが、こちらも、日本語学的な意義を感じる部分が見出せない。直近では、「と言ひたる」という表現の研究を標榜する玉地(2021)が出たが、これなどは全くもってわけが分からない内容となっている⁽¹⁾。

「と」の用例は膨大で、一定の条件を満たす用例に絞って調査を行ってもそれなりのデータが得られる。それゆえに、どういう条件に着目すれば有意義な議論が可能なのかを特に考えないまま、とにかく思い付きのテーマで条件を決めて用例のデータを出し、そこにまた思い付きのコメントを少し書き加えたというような体の「論文」がちらほらと出てくるのであろう。それが現今の状況であろうし、過去に遡ってもさして変わらない次元の「論文」は少なくないように思える。先行研究を意義のあるものとそうでないものにと選り分けて、今後の研究で継承すべき視座を明らかにすることが必要になっていると言すべきだろう。

以上の現状を踏まえ、本稿では、これまで筆者自身の研究の中で言及してこなかった先行研究を俯瞰して、古代語の引用助詞に関する今後の研究課題を洗い出したい。研究史の記述を目的とするわけではないが、引用助詞「と」に関する主だったテーマのそれぞれにおいて、古い研究から新し

(1) 玉地(2021)は前半で、古代語の「と言ひたる」の用例が連体修飾語ないしは係り結びの文末として現れることを述べているが、これは「と言ひたる」に限らず活用語全般の傾向として言えることで、高校生レベルの古典文法の知識によって推測できる内容である。後半では中世の「と言ひたる也」という形が引き合いに出され、これが「と言ひたる也+主節」という構造から主節が省略されて生じた形であるとか、「也」も省略されるとかいった、何の根拠も無い思い付きの奇説が並んでおり、何を見せられているのかという気分になる。

い研究までなるべく広く通観する形を取る。

本稿の構成は次の通りである。2節では「と」の語源に関する諸説の問題点を示し、それぞれの有効性について考察する。3節では、引用構文の基本的な分類枠（藤田2000の示す第Ⅰ類と第Ⅱ類）に関連する諸説を見て、今後の課題を考える。4節では、間接話法と直接話法に関する諸説を見て、古代語に特有の問題は見出されていないことを示す。5節では、従来の研究において引用助詞との区別が曖昧だった「動詞終止形+と」がどう捉えられているかを確認する。6節では、引用以外の用法も含めた「と」に対して何らかの統一的な把握を行おうとする見方（特に川端1958）を取り上げて、その問題点を述べる。以上2～6節は、「と」自体の文法的な性格に関する従來說についての把握である。次いで7節では、引用句「…と」の直前に現れる「曰く」「申さく」等のク語法に関する諸説の問題点や今後の課題を指摘した上で、こうしたク語法の構造が文法論的にどう捉えられるかについて筆者の試案を示す。8節では、ミ語法を受ける「と」に関する諸説を見て、文法論的に適切な説明を模索する。これら7・8節で扱うのは、資料の限界はあるものの今後さらに考察を深めるべき個別的な課題である。9節では、「とて」「といふ」「とぞ」等の、「と」と他の語によって形成される複合辞に関する先行研究の状況を見る。10節では、「と」「とて」などが承ける引用語句の在り方に関して従来指摘されている現象を取り上げ、それに対する筆者なりの見方を示す。これら9・10節で扱うのは、今後の開拓の余地が比較的大きいと思われるテーマである。

以上のうち、6節で見る川端（1958）は早い時期に古代語の「と」の諸用法を観察し、体系的に論じたものと言える。川端文法と呼称されることもある川端の考察はかつて一定の評価を得ていたようであるが、解釈の困難な表現が極めて多いためか、少なくとも引用表現の研究においてはその有効性が十分に検証されることは無かったようである。本稿ではこうした説を含めて、従来の説を広く積極的に取り上げていく。そして、単なる先行研究の羅列と整理に留まらないように、今後の課題となる点や筆者自身

の考えも提示する。以降、先学に対して逐一批判的な言辞を書き連ねることになるが、今後の引用助詞研究の進展を期して了とされたい。

2. 「と」の語源に関する諸説

古代の引用助詞「と」に関する言説の中で最も多く目につくのは、語源説である。文献以前の日本語について、語源を想像して云々するのはどうしても非科学的な弊に陥りがちだが、「と」に関しては語源が諸家の関心を集めたことは事実であり、古代語の実態に即した説もいくつか提示されている。それぞれがどの程度の有効性を持つのか検証してみることが必要な段階であろう。無論、先行諸説と全く関係の無いことが引用助詞の出自の真実であるという可能性もついて回るが、それなりの根拠に基づいて古代語の実情と矛盾しないような説を立てるのは学術の一環であろうし、将来、より確度の高い手段で語源を推定できるようになることがあれば、それに先立って諸説の論点を整理しておくことも意味を持つように思う。また6節で見ると、古代語における「と」の諸用法に対して、何らか統一的な理解を得ようとするような例もある。古代以降の諸用法の間に見られる派生関係が興味の対象となるならば、「と」の語源にまで考えを及ぼしておくことも必要であろう。

2.1 副詞説

引用助詞「と」の語源に関する最も一般的な説は、「とにもかくにも」「とまれかくまれ」等の慣用表現に含まれる「と」に由来するという考えである。この「と」は、慣用表現の中で同時に用いられる「かく」が副詞であることからすれば、やはり副詞だったろうと推定できる。この考えを副詞説と呼ぶことにしよう。

早い時期に副詞説を示した文献に、Aston (1904) がある。

There can be little doubt that, like its English equivalent, *to* was originally a demonstrative, and that it is identical with *so* of *sore*, “that.” It has still this meaning in the compound *to kaku*, “in that way or in this,” and in the phrase *to mare kaku mare*, “be it in that way or in this.” In many other cases *to* is best construed as equivalent to “this” or “thus.”

(Aston 1904: 139)

「と」に対応する英語の表現の「that」がそうであるように「と」も指示表現に由来する、という考えがはっきり示されている。その後、Aston と同様の見方を示したものに Sansom (1928: 245)・金田一 (1941: 180)・浅野 (1959: 46)・橋本 (1969: 137-141)・松尾 (1969: 349, 1970: 40)・小林 (1970: 229)・山口 (1993 a: 248-251)・吉井 (1999: 644)・佐佐木 (1999: 160)・亀井 (2017: 161) などがある。『時代別国語大辞典 上代篇』における「と(副)」の項目でも、「引用の助詞トはこれから成立したものであろう」という記述があり、藤田 (2014: 382-383) はこの記述を踏まえて「引用助詞の成立は、このように考えるより適切な考え方はなかろうと思う」とする。副詞説が最も一般化して、通説になっていると見て良いだろう。

しかし、この説には以下に示すように様々な疑問点がある。橋本 (1969: 137-141) が副詞説を支持するに当たって挙げた以下の傍証を見てみよう。

- ① 中古語において和歌の句頭に現れた「と」の用例がある。
 - (1) 忘れなむと思ふ心をつくからにりしよりけにまづぞ恋しき (古今・718, 橋本 1969: 138 の 2 例目に相当)
- ② Aston が言うように、外国語においても、指示表現が補文の標示に用いられることがある。
- ③ 「消つー消す」「放つー放す」など /s/ と /t/ が転換する現象があり、上代東国方言では助詞「ぞ」を「と」と言う例があることから、代名詞「そ」から「と」が生じていたとしても不思議ではない。

確かにこれらの点を見ると副詞説は受け入れやすいもののように感じられる。しかし、どれも決定的な根拠と言えないこともまた確かである。

①は、「と」が付属語ではなく自立語の側に入るような用法を持つことの証明のように見える。もしそうだとすれば、そのような「と」は副詞と考えざるをえないことになって、「とにかく」などの「と」と同源という発想へと繋がるだろう。説得性の高い話のようにも思えるが、現代語において次のような表現がありうることを考慮すると、疑問を感じざるを得ない。

(2) 「兄が、とてもいい人がみつかったって…」 「可笑しいな、別にいませんよ。女の人ですか」 「と思うけど…」 「女っ気はまるでないですよ。パートで掃除にくる小母さんはいるけど…」 (BCCWJ/平岩弓枝『女の気持』)

(3) 「それはまだ知らぬ。祇園は浮橋太夫に入れあげてござると聞いたが…むろん、吉良上杉をあざむくための佯狂苦肉の一策であろうな」 「と見るのが至当だろう。然し、原惣右衛門殿などは、必ずしも然うとは執らぬ。ことに、お軽は素人娘なので、大分、かましい噂だ」 (BCCWJ/舟橋聖一『新・忠臣蔵』)

(4) だがその腕を振りおろすより前に、巨大な化け物カラスはぱったりと仰向けに倒れた。「お見事」空蟬が笑っている。「と言いたいところだが、鉈を振りおろしてから逃げるのが遅い。その臭い液体をかぶったままではパトロールが続けられないぞ」 (BCCWJ/柴田よしき『宙都』)

こうした文頭の「と」は、おそらく「思う」「見る」「言う」など一部の動詞と連なる形での出現に偏るものと思われ、「と思う」「と見る」「と言う」をひとまとまりの複合辞と見ても良いのかもしれないが、いずれにせよ、付属語である「と」または付属語相当と考えられる辞的形式が、一定の条件下においては文頭に現れうることを示す例であろう。橋本が示すような「と」は、これらとは異質のものなのだろうか。和歌の句頭の「と」を自

立語と認定し、さらに「とまれかくまれ」等に化石的に残った副詞の「と」と同源のものと断じるのに十分な説明は、行われていないように思う。

次に②は、他言語を考慮するという新味からか、どことなく説得力を感じさせるものがある。しかし、言語類型論的観点を導入しようという発想なのであれば、英語だけでなく、系統の異なる様々な言語における補文化辞の語源を調べる必要があるし、いくつかの言語において指示表現から補文化辞への転成が確認できたとしても、もちろんそれは日本語の「と」の語源が指示副詞の「と」であると断ずる根拠にはならない。また日本語の引用句「…と」が副詞的成分であるのに対し、英語の「that」は代名詞相当で、that 節も日本語ではコト節に大体対応する点からみればやはり名詞節的なものかと思う。補文を作る点で「と」と「that」が共通するといっても、補文には品詞論的に複数種のものがあるのであって、語源を考えるに当たってその点を無視することはできない。

③にも同様の疑問点がある⁽²⁾。連用修飾成分を作る「と」の語源を、指示代名詞の「そ」と見做してよいものだろうか。仮に指示代名詞「そ」が「と」に転ずることがあるならば、名詞としての資格を考慮するに、たとえば「とを言ふ」「とを思ふ」のように格助詞が「と」に後接しても良いのではないかと思われるが、「とを」の用例は非常に少なく（筆者の調査では宇津保物語に3例、蜻蛉日記に1例、源氏物語に5例、大和物語に1例のみ）、また次のように命令表現の中でしか使われていない点において、格助詞「を」ではなく間投助詞の「を」が用いられたものと考えべきである。

(5) 娑婆の外の岸に至りて、とくあひ見むとを思せ。(源氏・若菜上・

4-115)

(2) 麻生(1958)は、万葉集東歌において係助詞「ぞ」に相当すると解されている「と」の用例に触れて、「「と」の根本性質はこの混乱に見ることができるように思われる」とする。引用助詞や並列助詞などの用法の他に係助詞の用法もあった可能性は否定できないが、そうした各種の用法が混乱していたとは考えにくいし、混乱の中に「と」の本質があるという考え方にも説得力は無い。

以上の通り、通説と思われる副詞説は実は根拠に乏しい。そして、さらに以下に示すような疑問点もある。

引用構文は、「おはようと肩を叩いた」や「あれを見ると指をさす」のように引用句「…と」の発話（または思考）と後続する述語句の表す動きが同一場面に共存するような意味構造を取ることもあり、藤田（2000）はこうした構造の引用構文を第Ⅱ類と呼んで詳細に分析している。藤田は、「おはよと言う」のような引用構文（こちらは第Ⅰ類と呼ばれる）では引用句の内容を指示副詞で受け直して「そう言う」という形が作れるのに対し、第Ⅱ類では引用句の内容を「そう」等で受けて「そう肩を叩いた」などとはできないという点を指摘しているが（pp.203-204）、この点は副詞説を考える上で重要である。3節で述べるように、上代においても引用構文に第Ⅰ類と第Ⅱ類の用例があったことはすでに確認されている。となると、第Ⅰ類の「と」は副詞説で説明できるとしても、第Ⅱ類の「と」の語源はどうなるのかという問題が残ってしまうのである。

図式化すれば次のようなことである。副詞説は（6a）から（6b）のような第Ⅰ類引用構文が生じることを想定するもので、これは一応成り立つ可能性があると言っても、（7a）の方はそもそも成り立たない言い方であるから、そこから（7b）のような第Ⅱ類引用構文が生じるという見方はできないものと考えられる。

- （6） a. 指示対象の言葉（文末）。指示副詞「と」+指示対象の言葉を発する行為を表す述語句
- b. 引用語句+引用助詞「と」+引用語句を発する行為を表す述語句（第Ⅰ類引用構文）
- （7） a. *指示対象の言葉（文末）。指示副詞「と」+前文を発する行為以外を表す述語句
- b. 引用語句+引用助詞「と」+引用語句を発する行為以外を表す述語句（第Ⅱ類引用構文）

この疑問を解消する方途としては、第Ⅱ類の「と」の起源に副詞「と」

とは別の「と」を想定する考えがあろうかと思う。次の2.1で見えるが、引用助詞「と」が、何らかの発話動詞の縮約形に由来する可能性があるとの見方がいくつか提示されている。少なくとも、引用の働きを持つ「と」の語源を一種類に限定しなければならない理由は無い。

ただ、それによって第Ⅱ類の出自に関する問題を回避できたとしても、(6a) から (6b) が生じるという見方にも疑問はある。すなわち、文頭の指示副詞が前文そのものを指示するからといって、そのまま前文末に付く付属語と化して、2つの文を一体化させるなどということが本当にありうるのか、という点である。「かく」や「さ」などでも引用助詞化している例が指摘できるならばこの点は問題にならないのかもしれないが、そうした例は見出せない。ある文の文末とその次の文の文頭との間には、何拍分かのポーズが入るのが普通であり、矢継ぎ早に話す場合などはそのポーズが消えることもあるが、それでも文末と文頭の間の切れ目は意識されるのが常であろうから、単に繋がるとか、付属するようになるかと言うだけでは十分な説明になっていない。

なお、最初に誕生したのが第Ⅰ類で、第Ⅰ類から第Ⅱ類が派生した、というような経緯を仮想する案もあろうかと思う。これならば、(7a) から (7b) が生じるというような無理な構図を持ち出さなくてよくなるが、今度は第Ⅰ類から第Ⅱ類が派生する経緯というものをどのように説明するかという問題が生じる。両者はかなり異なった構造を持つ構文であり、一方から他方が生じるなどということは簡単には説明できない。

2.2 発話動詞説

次に見るのは、何らかの発話動詞が縮約して「と」になったとする案である。語源となる発話動詞の語形が殆ど想像できない点に憾みはあるが、類型論的には自然な発想のようである。これを発話動詞説と呼ぶことにしよう。

Chappell (2017: 2) は各言語における補文化辞の起源を、(i)「こと」

を表す名詞, (ii) 代名詞・疑問詞・関係代名詞, (iii) 与格・向格・位置格の標示語または前置詞, (iv) 発話動詞, (v) 類似動詞, という5通りに整理している。中でも、発話動詞に由来する補文化辞を有することが確認されている語族・語派は多岐にわたり、チベット・ビルマ語派、タイ・カダイ語族、ミャオ・ヤオ語族、オーストロアジア語族、オーストロネシア語族、アルタイ諸語、インド・イラン語派、ドラヴィダ語族、セム語族、チャド語派、クワ語派（ニジェール・コンゴ語族内の1グループ）が挙げられている。日本語の言語系統を明らかにすることは困難だが、アジア・アフリカの諸言語でこのように広く発話動詞由来の補文化辞が用いられているとなると、日本語の「と」もその方向で説明できる可能性を模索してみる必要がある。

Akiba (1978: 93) は「と」が発話動詞に由来するという説を示し、次のような用例を挙げている。

(8) たけとりの翁、この工匠らが申すことは何事ぞとかたぶきをり。

(竹取・34, Akiba 1978: 94 の (3.76) に相当)

(9) 道来る人、「この野はぬすびととて、火つけむとす。(伊勢

勢・一三・125, Akiba 1978: 94 の (3.77) に相当)

(8) は第Ⅱ類引用構文の「と」と解される。Akiba は、(8) の「と」自体を発話動詞の連用形と捉えることができ、それゆえ連用形接続の「て」が付いた(9)のような「とて」が存在しうると考えているようである。Akiba の示す図に従って、発話動詞が引用助詞「と」に変容する過程を考えれば、次のようなことである。

(A) の左の「S」は「主語名詞 (NOM) + 引用内容 (QUOT) + 発話動詞述語連用形「と」 (PRED)」という構造の従属節で、それが右の「S」の示す主文（主語名詞は共通するので省略される）と並列関係で連なっている。主文の内容に特に規定は無く「……」と示されている。この中の発話動詞述語連用形「と」が成分としての資格を失って、引用内容 (QUOT) を標示する付属語相当のものに変容すると、文全体では述語の数が一つに減るの

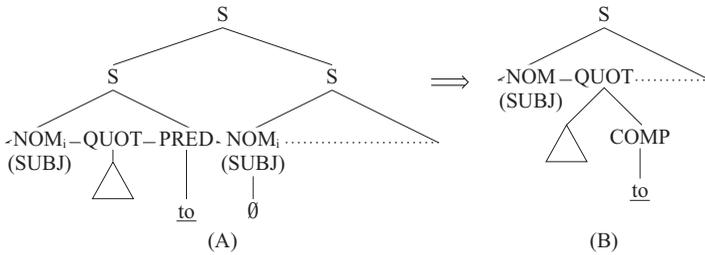


図 Akiba (1978: 93) の「Diagram-9」

で、(B) のような単文構造として図示されるようになる。Akiba の図は以上のように理解できよう。

さて、Akiba (1978) の提案は第Ⅱ類引用構文の起源を示したものであることになるが、実のところ一部の方言において、第Ⅰ類の構造を作ると思しい引用助詞的形式が発話動詞から発達していることが指摘されている。

小西 (2013) は、近畿地方や中国四国地方において「言う」のテ形に相当する形式が、引用助詞「と」相当の標識として使われることがあるとしている。

- (10) ナニ カイニ イク ユーテモ デッチニ コドモシュー チョット イッテ コーイ ユーテ ユータラ モー スグ。[何 [を] 買いに行く [と] いっても丁稚に「子供衆ちょっと行って来い」[と] 言って言ったらもうすぐ。] (COJADS/ふるさとことは集成・大阪・1905年生, 小西 2013: 306 の (20) に相当)

この例の「ユーテ」を「言って」の意で捉えると、直後の「ユータラ」と意味が重複してしまうが、「と」に相当する形式と見れば、「ユータラ」との共起も問題なく理解されるだろう。小西はこのような「ユーテ」等の形式の成立について、次のような用例に着目しながら説明を加えている。

- (11) コレデ 全部 片付イタユーテ 喜ンダ。[「これで全部片付いた」}と言って/と} 喜んだ。] (小西 2013: 314 の (56))

すなわち、(11) は「…と言って喜んだ」のような共通語訳を与えること

もできるが、述語動詞の「喜ぶ」が発話の意味合いを担うと解されるならば、「ユーテ」の部分が発話の意味を担う必要がなくなり、動詞としての意味が希薄化するというのである。これは、発話動詞のテ形が引用助詞化して第Ⅰ類の引用構文の構造を作るようになるプロセスを示したものと言える。

文法化して引用助詞相当となった「ユーテ」等が実在するとなると、次のような用例の「ユーテ」においても引用助詞相当であるという意識が生じ、第Ⅱ類の構造を生じさせる契機になりうるのではないか。

- (12) タケーケー ユーテ ウエテモ テンコーガ サユー スル
 ケー [高いから [と] 言って植えても天候が左右するから]
 (COJADS／ふるさとことば集成・岡山・1919年生)

つまり方言学の知見を援用すれば、上代以前の日本語においては、テ形に相当するような発話動詞の連用形が、係り先の動詞（「喜ぶ」など）も発話の意味を担いうる環境において意味を希薄化させ、また音縮約を起こすなどして「と」という形になり、第Ⅰ類の構造を成立させたのち、Akiba (1978) が図示したような形で第Ⅱ類の構造が成立することをも促した、という経緯を想定することが可能だろう。

以上に見た発話動詞説は、前項で見た副詞説に比べると言語類型論的に自然な発想である点と、実際に方言で起きている現象を傍証とすることができる点で説得力を持つ。

それに加え、この説を採れば次のように引用句が連接する現象が存在することも、引用助詞「と」自体に発話動詞の中止形相当の働きが残存していたのだとすれば、説明がつくように思える。

- (13) 少将, 「かの北の方に, いかでねたき目見せむと思へばなり」と
 のたまへば, 女君, 「これはや忘れたまひぬ。かの君や憎かりし」とのたまへば, 少将, ①「いと心弱くおはしけり。人の憎きふし思し置くまじかりけり」と, ②「いと心安く」とのたまひて, 臥したまひぬ。(落窪・二・146)

古代語においては複数の引用句「…と」が接続して現れることがしばしばあり、この(13)の①と②がそうであるように、基本的に一続きの会話ないし思考の内容を分割して示すだけの構造を取る(拙稿2015)。こうした「と」の用法は、事態を時系列に沿って継起的に繋いで示すという連用中止形の働き方に、よく似ている。

なお Vovin (2008: 554-556) は上代語の「と」に助詞ではなく未だ動詞の段階にあるものがあると考え、「言ふ」「思ふ」等と共に起する「と」と共起しない「と」を区別する考えを示している。たとえば次の例の「と」は係助詞「ぞ」の結びで連体形になっているとされる(p.556)。難解歌なので木本通房『上代歌謡詳解』(武蔵野書院, 1942年)による別解と訳も示す。

- (14) 汝をぞ嫁に欲しと誰 [奈礼乎曾与羊爾保師登多礼], あむちのこむちの萬の子。南无々々や, 仙さかもさかも, 持ちすすり, 法申し, 山の知識, あましにあましに。(日本霊異記・275)

別解: 汝をぞ嫁にほしと, たれ, 菴知のこむちの万の子, 南無南無, させ栄ふ酒もちすすり馬牛や, 万の知識あましに, 知識あましに

訳: 汝を嫁にほしいと言ふのは誰でせう。菴知村のこちらの万の子を欲しいと言ふのは誰でせう。嗚呼, 嗚呼酒を沢山つんで馬牛に宝をつけ栄えて求婚いたしました。万の子に智慧があつたなら, あんな目にはあはなかつあのに, 万の子に智慧が備はつてゐたならば災を免れたのに。

下線部は一見して倒置の構造を取っているかのようだが、「誰, 汝をぞ嫁に欲しと(言ふ)」のような疑問文で「誰」が倒置されるような現象は、現代語の感覚からすると奇妙なものに思える。次の(15a)から「誰が」を倒置によって文の後に置こうとすると、(15b)のように意味が変容してかなり使いにくい形になるだろう(使うとすれば相手の「あなたを嫁に欲しいと言っている」という言葉を鸚鵡返しした上で、その主語を開き出そうとするような場合だろうか)。

(15) a. 誰があなたを嫁に欲しいと言っている？

b. #あなたを嫁に欲しいと言っている。誰が？

一方、この「と」自体を発話動詞と見れば、訳にもある通り綺麗に意味が通るようになる（この場合 Vovin の言うように係り結びによって連体形になっているのではなく、分裂文の主語となるべく準体言化していることになる）。こうした用例を一定量指摘できれば、発話動詞説はかなり有力なものとなるだろう。しかし文末に「と」が現れる用例は少ないことが指摘されており（小田 2015: 526, 拙稿 2022 b）, 「と」自体を述語相当と見做すのは難しいように思える。

さて、発話動詞説は従来の通説である副詞説よりも優れた面がいくらかあったように思うが、疑問点も 4 つほど挙げておきたい。

1 つ目は、「と」が思考内容等の引用にも問題無く用いられるのはどうしてか、という点である。発話動詞説は、第Ⅰ類にせよ第Ⅱ類にせよ、「と」を発話動詞に由来するものと見るわけだから、思考内容等の引用も可能になる経緯を想定するか、または思考内容等に付く「と」には別の出自を想定するといったことが必要になる。小西（2013: 312-313）は富山方言において「ユーテ」が限られた条件下で「思う」に対する引用句を標示できることや、「オモテ」が文法化して思考動詞に対する引用句の標示に使われる例も実在することなどを指摘している（多くは用いられないようである）。これを踏まえるに、「と」は発話内容を承ける用法から思考内容を承ける用法にも転用されたか、または思考動詞の縮約形もまた偶然に「と」という形になって思考内容を承ける用法を持った、という経緯がありえようか。

2 つ目は、「と」が発話動詞の連用形に由来するならば、「て」以外の連用形接続の付属語が付かないのはどうしてか、という点である。「とけり」「とつ」「とながら」などといった承接の実例は見出しがたい。この点では、指示副詞が「さて」「かくて」のように「て」を伴いうることの一環で「とて」を捉えられる副詞説の方が魅力的に思えてくる。ただ、「と」

の出自と目される発話動詞連用形の文法化は、あくまで継起関係で後続節に係っていく形において起きていただろうから、継起関係を失わせることのない「て」及び係助詞・副助詞などは接続できて、「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」のように連用中止の用法を持たない助動詞や、継起接続とは異なる意味関係で後続節とつなぐ「つつ」「ながら」の後接が不可能であるなどといった点はそれほど問題にならないのかもしれない。

3つ目も付属語の付き方という観点で、次のような「…となり」という形の存在が問題になるように思われる。

- (16) よし、かく言ひそめつとならば、何かはおれてふとしも帰りたまふ。(源氏・夕霧・4-486)

助動詞「なり」が活用語の連用形に付くことは基本的に無い。こうした「となり」に含まれる「と」には別の出自を想定するか、あるいは「と」の本来的性格を連用形相当と考える場合でも十分ありうる形と見るか、いずれにしても合理的な説明が必要になる。

4つ目は、「と」が古代語においては情意形容詞と共起できる点をどう説明するか、という点である。

- (17) 「何わざするならむ」と、ゆかしくて、人目見はかりて、やをらはひ入りて、いみじく繁き薄の中に立てるに、…(堤中・446)

この用例では、引用句「…と」の示す情意は「ゆかし」の表す精神状態と一致する(拙稿 2022c)。つまり、「と」は状態性の意味合いが本来的であった可能性もあるように思われる。発話という動きを描写する動詞に由来するはずの「と」が、古代語においてこうした特性を発揮していることはどう捉えたら良いだろうか。

以上の通り、発話動詞説もいくつかの疑問点はあった。しかし、それらは無理なく説明できる可能性もあり、決定的に発話動詞説を棄却する根拠になるとは思えない。副詞説と比べると、文頭の副詞が前文末の付属語と化すというような、他に例の見出しがたい現象を持ち出したりする必要も無いし、第Ⅱ類の構造が生じた経緯の説明も容易である上、言語類型論的

観点においても例外とならず、魅力的な説であると思う。何より、一部の方言において実際に「ユーテ」「オモテ」の引用助詞化が観察されていて、これを踏まえると、「と」の出自に同様の経緯を想定できてしまう。以上の点から見て、通説となっている副詞説よりも、発話動詞説の方が有力だと筆者は考える。

2.3 繫辞説

次に検討するのは、繫辞 (copula) の「と」に由来するとする説である。これを繫辞説と呼ぼう。

Frellesvig (2001: 6) は次のような命名構文 (naming construction) における「と」を繫辞と見て、ここから引用助詞用法が派生するという案を示している。

(18) 大和の国を蜻蛉島といふ [野麻等能矩爾鳴婀岐豆斯麻登以符]

(日本書紀歌謡・75, Frellesvig 2001: 6 の (19) に相当)

すなわち、この用例は次の (19 a) のような図式になっていて、これが (19 b) に変容し、さらに (19 c) に変容する、ということのようである。

(19) a. [N₁を N₂と (繫辞)] いふ

b. [N₁を N₂φ (繫辞)] と (引用助詞) いふ

c. [引用節] といふ

確かに、Frellesvig の言う命名構文における「と」は名詞 (N₂) のみに付き、N₁との一致関係を示すと解されるので、繫辞として働いていると見ることができよう。10.1 でも触れるが、筆者も思考動詞を述語とする「N₁を N₂と思ふ」(認識動詞構文) を取り上げ、名詞 N₂に直接「と」が後接すること、及び「N₁を」と「N₂と」の語順が入れ替わらない点で「N₁を N₂とす」のような変化動詞文と共通することを指摘し、この「と」も引用助詞ではなく繫辞であるという見方を示したことがある (拙稿 2016 b)。

繫辞説⁽³⁾は、発話・思考に限らず様々な言語行為を表す動詞を射程に入

(3) 川端 (1958) も引用節「…と」の生じ方として Frellesvig (2001) と同様の 〆

れることができる点は前項の発話動詞説よりも魅力的である。また、副詞説と発話動詞説は実例を指摘できない語を語源と見るところに難点があったが、繫辞説では語源とされる繫辞の「と」が明らかに実在するので、無理の少ない考えであるようにも思える。そのためか、Wrona (2008: 346) のように Frellesvig (2001) の提案を支持して、上述のような変化過程が発生した後に、引用句「…と」を必須成分とする述語が無い表現（つまり第Ⅱ類引用構文など）での使用へ発展したという考えにまで話を進めるものもある。

引用助詞「と」を助動詞の連用形と見る時枝 (1954: 106-107)・此島 (1978: 108) も、この繫辞説に連なるものであろう。学校文法において、いわゆる断定の助動詞「たり」は「と」を連用形として持つことになっているが、引用助詞「と」もそこに含まれると見れば、時枝や此島が述べるように、「とて」という形が生じることの説明は容易である。なお、引用表現「…とあり」に用いられる「あり」が助動詞等が持つ補助活用を作り出す補助用言と同様の性質を持つ（拙稿 2021 b）ことは、引用助詞「と」を助動詞の連用形とする説の傍証になろうかと思う。

このように、繫辞説も利点は少なくないのだが、やはり難点がある。大きな問題と言えるのは、繫辞の「と」から引用助詞の「と」への派生の根拠が直観的把握に留まっており、特に文法論的な説明がなされていない点である。名詞接続の繫辞が引用語句全般に後接するようになるのはどうしてなのか⁽⁴⁾。ヲ格名詞 N_i が消えて引用節になるという変化はなぜ可能なのか。第Ⅱ類引用構文への派生過程はどういうものなのか。これらのことについての合理的な説明は容易でない。

それに、派生経路の方向は本当にこれで良いのだろうか。(19 abc) に示される派生経路を逆に辿れば、引用助詞から繫辞が派生する図式が得ら

ㄨ 経路を想定しているが、「と」が繫辞か引用助詞かということを論点とするわけではないようなので、ここでは取り扱わず、6 節で詳しく検討する。

(4) Vovin (2008: 550) にも同様の批判がある。

れる。繫辞の「と」との間に派生関係があるのだとしても、どちらが発生源であるかを考える必要がある。

2.4 呼格の「と」

管見に入った限りでは他に、松尾（1969: 349）の「平安初期の点本に呼格の「ト」があるという指摘（鈴木一男「訓点語と訓点資料」12, 昭和34・8）は、「と」の起源を考えるうえでの示唆になると思う」という記述があるので、一応触れておくことにする。

鈴木（1959）は、平安時代初期の訓点（多くはヲコト点）において「長老と」「阿難と」「仏子と」などのように人物を指す名詞の後に付いて呼び掛け（呼格）を示す「と」の存在を示し、これが、ミ語法に付く「と」（8節で扱う）や「我は解かじとよ [和波等可自等余]」（万葉・二十・4404）のように使われる文末の「と」にも関連する可能性があるとした（pp.49-50）。ミ語法に付く「と」や文末表現を承ける「とよ」は引用助詞の「と」が使用されたものであろうから、引用助詞「と」の由来として、前項までの説とは異なる案が示されたことになる。

現代語の助詞「よ」は、「息子よ、立派に育て」などように呼び掛けで用いられる場合以外に、前接語にこれといった制限の無い間投助詞用法や終助詞用法も持っており、文節末や文末に自由に現れる。引用助詞の「と」も前接語に制限は無いと言ってよいので、一応、共通点を指摘できるということにはなるかもしれない。しかし、詰まるところ呼び掛けと引用とは全く異なる働きであり、両者を結び付けて考えることは難しい。以下のように、引用助詞「と」と呼び掛けの「と」は全く異なる出自のものと見る方が妥当ではないかと思われる。

山口（1993 a: 250-251）は呼格の「と」を並列助詞の「と」の起源と見ている。すなわち「や」「か」「なり」などの並列助詞は「文末の陳述辞」から転化したものが多く、呼格の「と」も古くは終助詞的な用法を備えていて、それが並列助詞として残ったのではないか、というのである。この考

えは、上代以前の日本語において实例の確認できない形式として終助詞の「と」の存在を想定するものだが、特に無理なところは無いように見える。金田一（1964: 432, 439-440）によれば、中世において並列助詞の「と」は引用助詞の「と」とはアクセントが異なっていたようであるから、呼格の「と」もまた、引用助詞「と」とはアクセントが異なっていたのではないかと想像される。

3. 第Ⅰ類と第Ⅱ類に関する説

語源説の次に見るべきは、引用構文の基本的な分類枠である第Ⅰ類と第Ⅱ類に関する言説と課題だろう（現代語における引用構文の第Ⅰ類・第Ⅱ類という分類に関しては藤田 2000 で詳しく論じられている）。第Ⅱ類に関しては、「とて」との相違も問題になる。

3.1 第Ⅰ類引用構文に関して

先に、第Ⅰ類引用構文に関する先行研究から見ると、「と」が「言ふ」「思ふ」等の述語に係って、発言・思考の内容を引用するのに用いられるという点は現代語と同様であり、用例もありふれているためか、それ以上の詳しい観察・考究が行われる向きは殆ど無いと言ってよい。しかし藤田（2014）・鶴田（2018）を踏まえるに、一定の範囲を決めて全数調査を行うことが必要ようである。

藤田（2014: 57）は、古今和歌集に見られる「と」の全例を観察して、係り先の動詞の種類と用例数を示している。それによれば、1位は78例の「思ふ」、2位は52例の「言ふ」となっている。これは予想の付く範囲のことだが、「見る（見ゆも含む）」が「言ふ」と並んで52例あるという点は注意される。現代語でも「…と見る」「…と見える」という言い方はあるが、これほど上位に来ることは無いだろう。「見る」を述語とする引用構文の実態については拙稿（2016a, 2021b）で詳細に分析したが、「見ゆ」に

関しては主体の有無について論じる山口（1983）があるものの、引用句内部の語句の在り方や「…と見る」との関係など不明な点が多い。

また「知る」が13例で5位となっている点も重要と思われる。現代語でも「…と知る」という形はあるが、やや使いにくくなっているようで、井上（1983: 254）のように「叙実述語は「と」を取らない」と断言するものもある。井上は現代語では「…ことを知る」という言い方が自然だと見ているようだが、中古語における「…と知る」と「…ことを知る」の実態はどうなっているのだろうか。「…と知る」の用例が一定量現れるのは、古代語における「と」の特性に拠るのだろうか。

そして、5例未満のものは18語あるとされるが、それらの動詞も古今和歌集以外の諸資料にまで調査範囲を拡大すれば分析に堪えるだけの量の用例が得られるものが少なくないだろう。Wrona（2008: 338）は、具体的な数量は示さないが、古代語において「…と待つ」の用例が多いことに着目している。現代語の「待つ」は言語行為の意味合いが読み取りにくく、引用構文の述語として現れる頻度は低いはずである。Wronaは「と」が「待つ」によって疑似的に選択される（pseudo-selected）という見方を示しているが、実際のところはおそらく、古代の「待つ」は思考動詞の一種であり、その思考内容を示す引用句「…と」と共起して第I類引用構文を形成していたのであろう。それか、Wronaの言う「疑似的選択」のようなことを考えなければならぬとすれば、それは引用句「…と」が古代語においてのみ持つ特性と関わるのかもしれない。いずれにせよ、現代語と比較しながら、古代語の引用句の係り先をよく調べる必要がある。

鶴田（2018: 21-22）では、万葉集における引用句「…と」の係り先となった動詞（句）の種類と用例数が示されている。これを見ると、「言ふ」「思ふ」が1・2位を占めるのは古今和歌集と同様であるが、3位に「待つ」が来ており、Wronaの指摘が裏付けられる。4位に「告ぐ」が入っている点も注意されるが、これは引用助詞の性格の問題というよりも、歌の題材の傾向と関係がありそうである。「知る」（5位）、「見る」（6位）、「聞

く」(7位)が上位に来ているのは中古語と同様の傾向であるから、引用助詞が知覚動詞と共起しやすいことは古代語の特徴と見てよいだろう。それが引用助詞のどういう性格に起因するのか考えなければならない。鶴田の示すデータの中で最も興味深く感じられるのは、「思ふ」「見る」が上位に来ているのに対し、その自発態である「思ほゆ」「見ゆ」の用例が殆ど無いという点である。これは中古語の状況と異なる。上代語と中古語の間において、自発動詞の意味に違いがあるためなのか、それとも引用助詞「と」の性質に違いがあるためなのか、定かでない。

3.2 第Ⅱ類引用構文に関して

次に見るのは、第Ⅱ類引用構文の捉え方である。

第Ⅱ類に言及する論者は決して少なくないが、大抵は「と言って」「と
思つて」の意であるとか、「とて」と同義だというような簡単な解釈を述
べるにとどまっている(大塚 1934: 54, 104, 松尾 1957: 13, 佐藤 1962: 264, 松
尾 1969: 350・1970: 39, 岩井 1976: 266, 西田 1993: 174 等)。多少踏み入って考
察しているものでも、岩下(1982: 332)のように「相と相の組み合わせに
力があつた」などとよく分からないことを述べているのは特に意味が無い
し、古代語の第Ⅱ類に関しては文法論的に重要な議論が行われた例が殆ど
見当たらない。管見に入った範囲で重要と思われるものには、用例の使用
割合に関する報告として浜田(2008)・藤田(2014)があり、そのほかに用
例の解釈の幅を示す鶴田(2018)がある。

浜田(2008: 57)は、竹取物語・源氏物語(桐壺～藤裏葉)・落窪物語にお
いて「と」に「言表動詞」か「行為動詞」のどちらが続くかを観察し、
「行為動詞」の数量が2～3割程度であることを示している。藤田(2014:
57)による古今和歌集の調査では、引用構文の用例 296 例のうち第Ⅱ類は
42 例となっている。これらを踏まえるに、調査を行えば古代語における
第Ⅱ類の引用構文の用例が一定量集まることが期待されるのだが、大切な
ことはそうしたデータから何を読み取るかである。浜田は中世以降に

「と」を「行為動詞」が承ける用例の量が増えることを指摘し、その事情について「発話が鉤カッコで安定的に区画されるようになってきたために、「と」の後にわざわざ「言う」「話す」「語る」等の言表動詞に連承させる必然性が薄れてきた事情が作用したとも理解されるのではないだろうか」と述べている。これは裏を返せば、古代は「言う」等の発話動詞が表記手段の一つである鉤括弧の代わりに担っていたというような考えかと思われるが、誠に奇妙な発想であり、受け入れがたい。「…と述語」という引用構文において「…」の部分が引用語句であることは「と」によってすでに明示されており、地の文に属する述語動詞との差を示す「区画」はもとより明瞭である。述語の種類が何であれその点は動かないだろう。古代は中世以降より第Ⅱ類の使用頻度が高いのだとすれば、各時代の第Ⅱ類の用法を調べながら変化の事情を探る必要がある。

鶴田（2018: 23-29）は、万葉集の引用句「…と」が「動作を表わす動詞」に係る用例は「動作中の心内発話」「動作の意図」「動作の意味」「比喩」「動作を伴う発話」「動作の理由」といった解釈になるとしている。大部分は「動作中の心内発話」にまとめ上げてしまえるように見えるが、細かに分類すべき文法的な根拠が無いとも限らないし、鶴田の示す解釈の幅が現代語の第Ⅱ類と同様なのかどうかは考えてみる必要がある。

他に第Ⅱ類に関してどういったことが検討されなければならないかと言えば、松尾（1969: 352）が「とて」について「この表現が「と」とどう違うのかということも調査しなければならない問題であろう」とするように、まずは類義の表現との比較という観点が大切だと思われる。類義の表現と比較するのは、ある語の意味特徴を浮き上がらせるための基本的な手段である。「とて」と第Ⅱ類の「と」を比べれば、引用される語句の種類や係り先の述部の違いなど、それぞれの特徴を示す事実が見えてくるかもしれない。「と言ひて」「と思ひて」や現代語の第Ⅱ類などとの比較という観点もあろう。

3.3 「…を…と」構文に関して

第Ⅱ類と似た解釈を持つ形として、次のような「…を…と」構文がある。

(20) 秋の田のいねてふ言もかけなくに何を憂しとか人のかるらむ
(古今・803)

(21) しひてゆく人をとどめむ桜花いづれを道とまどふまで散れ (古
今・403)

(20) の下の句は「何が辛いと思って、人は離れているのだろう」のような意味、(21) の下の句は「どれが道だと思って迷うくらいにまで散ってくれ」のような意味と考えられる。現代語では「何を辛いと離れるのか」とか「どれを道と迷う」とかいう言い方は少々不自然であるため、こうした「…を…と」構文は時折注意を向けられることがある(奥村 2001: 18 など)。

森重(1950: 18-19)は「…を…と」とその後の述語の間に「或る空白の存する事が感ぜられる」とし、その空白期間の間に、「…を…と」を承ける「思ひて」等の述語を「補入」して解釈している。「…と」があれば必然的に述語を予想できるゆえに述語の省略が可能になっているのだという。しかし、文末の述語ならばともかく、文中の従属節述語が省略されるという考えには無理があるし(藤田 2000: 187)、仮に、そうした省略がありえたのだとした場合、どうして現代語ではそれが不可能なのか説明が付かない。「…と」に対し述語が必然的に予測されるとの謂いについても、予測される述語は(20)のように「言ふ」「思ふ」「見る」など様々であり、「必然」とは言えないように思う。そして、(21)では「どれを道と散って」のように解すと意味が通らない。「…を…と」を必須成分に取る「思ふ」等の動詞を「補入」して解す方にこそ無理があるだろう。森重の考えは採るべきものではない。

本位田(1984: 307)は「を」の係り先は「と」であると考え、「[と]には「として」というような動詞の意味をもつことがあるわけである」と述

べるが、これも現代語訳の際に「と」を「とあって」などとせざるを得ないところから来る着想だろう。「と」が動詞的意味を持つとするのは、「と」の語源に発話動詞を想定する説(2.2)を採れば、あながち無理のある見方でもないのかもしれないが、「と」はどう見ても動詞と言える外形をしておらず、発話動詞由来だとしてもそのことが語源意識に上ることがあったか疑わしい。共時的にはやはり「と」は動詞ではないのであって、「と」による格支配があつてその中に「を」が生じるとものとは考えにくい。もしそのようなことが起こっているのだとすれば、ヲ格成分以外にも主格成分や連用修飾語などが色々と共起しても良いはずだが、そういった現象の存在を指摘した報告例も見出せない。

岩下(2003: 329-330)は、「どういう構文として解釈できるかはっきりしないいくつかの例を「と」の性質として考えてみたい」「いくつかの関係の可能性を持った、解釈する立場から見れば曖昧な表現を、どれか一つに決定されるべきものとみずに、同時に存在を認めてみる」などとしているが、これは「…を…と」はどういった構文構造なのか不明である点こそが本質だ、という主張かと思う。諸説ありうるかとは思ふが、岩下のように考察を放棄したかのごとき一言で終わりにするのではなく、最も妥当な分析方法を模索していかなければならない。

おそらく、延喜式祝詞に多く見られる次のような「…を…と」構文を分析する武市(1987)の記述が、重要な示唆を与えるものである。

(22) 四方の国を安国と平らけく知ろし食すが故に、…[四方国乎安国登平久知食故](延喜式祝詞・祈年祭・101)

武市はこの構文の用例から帰納される事実として、「[ヲ]をとって対格となる体言の一つの属性を異なる体言で言い換えて、それを「ト」で受けて状態を表す連用修飾格として用いたものである」(p.9)と記述している。「…を…と」はこうした一般化が可能な固定的な型の連用修飾要素であり、その中から「…を」を取り出して、通常の格成分である「…を」と同様のものと見做そうとするのには無理があるということだろう。延喜式祝詞に

においては名詞のみに「と」が付くようだが、引用助詞の「と」との間で類推が働くなどして、(20)の「憂しと」のように形容詞を入れた形もありうるようになったのではないだろうか。「…を…と」構文は、第Ⅱ類引用構文と似た解釈を持つが、もともとは体言の属性を示す「…と」に由来するもので、引用助詞の「と」とは出自も働きも異なっていた可能性がある。

さて、このように考えたとき、どうして「を」を含む形になっているかが問題になろう。(21)の「いづれを道と」は、新編日本古典文学全集の頭注において「「いづれを」は主語で、その述語は下の「道」とされているが、これをヒントにすると、「を」は主語を標示するものに由来している可能性が考えられる。竹内(2008: 54)が示すように、古代語の「を」は属性形容詞の主語を標示しえたようであり、これとの関係を考えておく必要がある。

(23) 海山も隔たらなくになにしかも目言をだにもここだ乏しき (万葉・四・689, 竹内 2008: 54 の (13 a) に相当)

竹内は「総じて、上代語の格助詞ヲは、他動詞文の目的語を標示する例が圧倒的に多い」(p.58)とも述べているが、このことからすれば、こうした用例は極めて少なく、上代においてすでに減びつつあった語法だと思われる。しかし先史時代まで遡れば、属性形容詞以外にも、属性を表す「名詞と」の主語を標示しえた可能性も想像できる。そのような「を」の古い用法が、「…を…と」の中に化石的に残ったのではないだろうか。

筆者は「…を…と」構文を引用構文とは異質のものとするが、以上の通りははっきりしたことは言えない。用例調査に基づく分析・文法論的な位置付けも今後の課題として残っている。

4. 話法に関する説

本節では古代語の話法に関する先行研究を見るが⁽⁵⁾、あらかじめ言うならば、今のところこれといって重要な論点は導き出されていない。

古代語の話法についてそれなりの紙数を割いて論じた文献としては、佐伯(1966: 32-46)を挙げることができる。佐伯の考え方の基本は、誰かの口にした言葉を全く変容させず、そのまま「…と」などの引用句に収めて文中に組み込んだものが直接話法で、少しでも元の言葉から変わった部分があれば「直接話法の形はとっていても、それが必ずしも純粋に直接話法でない場合」に当たるということだが、そのようにして直接話法とそれ以外を区別しようとするにはあまり意味があるようには思えない。佐伯の言う“純粋な直接話法”とは「人の言つたことをそのまま文中に引用する」(p.33)場合を指すのであろうけれども、他人の発言を引用しようとするれば、普通は元の言葉から多かれ少なかれ変容が生じるものであろう。一字一句そのまま再現するケースの方が稀ではないだろうか。声色まで真似て言葉を再現しようとする場合から、元の発話内容の要点だけを引用者視点の言葉で表現し直す場合まで、“純粋さ”にはグラデーションのようなものがあるだろうが、佐伯は“純粋な直接話法”というものをどういった根拠に基づいてどの段階に設定しているのか不明だし、そのようなものを

(5) 「私は馬鹿だと太郎が言った」における引用句「…と」は、「私」の指す人物が太郎であれば直接話法、話し手自身であれば間接話法と判定されるだろう。このように、話法は引用句「…と」についての文法論的なテーマのように見えるが、本来、少なくとも現代語においてはそう考えるべきではない。なぜなら次のように「と」を伴わない引用表現においても、やはり間接話法と直接話法の両方の解釈が現れるからである。

(i) 私は馬鹿だ、そう太郎が言ったのかね？

(ii) 太郎でも、「私は馬鹿だ」くらいのことは言える。

古代語においても同様だったろう。ただ、話法の区別は引用助詞「と」の用例には常に付きまとう問題であるから、本稿で取り上げて確認しておくことにした。

設定したところでどのような議論が可能になるのかも分からない。無論のことだが、以上のことを考える際に古代語に注目する理由も無い。

また佐伯は、英文法で「that」の有無という形式的対立が話法の区別と対応することに影響されてか、「直接話法の形」として「…と」などを挙げているが、現代日本語においては「…と」内部において話法の区別と見るべき現象があり、その点については藤田(2000: 146-186)が詳しく論じている。「…と」を「直接話法の形」と認定してしまうやり方は、少なくとも現代語の話法を考える上では望ましくないし、古代語においても同様であろう。

佐伯は「…と」を直接話法の形として挙げる一方で、形容詞連用形やテ節など、引用句「…と」以外の形が思考動詞や発話動詞に係って、その内容を示すと解されるものを間接話法と呼んでいる。そうになるとやはり「…と」の内部における話法の区別は考えないということかと思えるが、元の発話から少しでも変容した形で再現された言葉は直接話法でない(つまり間接話法)ということであったから、「…と」の内部にも間接話法を認めることになる。となると、「…と」や形容詞連用形、テ節など色々と異質なものを混ぜこぜにして、全部間接話法だと言っているも同然であり、これでまともな議論が可能になるとは思えない。

一方、Wrona(2008: 296-301)は、古代語の引用句「…と」に間接話法と直接話法の両方がありうることを明確に指摘している⁽⁶⁾。

(24) 生きてあらば見まくも知らずなにしかも死なむよ妹と [将死与妹常] 夢に見えつる [夢所見鶴] (万葉・四・581, Wrona 2008: 296の(3)に相当)

(25) 暇なみ来ざりし君にほととぎす我かく恋ふと [吾如此恋常] 行きて告げこそ [往而告社] (万葉・八・1498, Wrona 2008: 298の(8))

(6) Wronaの用語は「direct quotation」「indirect quotation」であるから「直接引用」「間接引用」と訳すべきかと思われるが、話法の問題を扱っており、用語を区別する必要は無いので「直接話法」「間接話法」という用語で統一した。

に相当)

Wrona は (24) の「…と」を直接話法とし、その根拠として終助詞「よ」が現れていること、「妹」が右方転移 (right-dislocation) していることを挙げている (p.298)。藤田 (2000: 150) は、現代語の引用句「…と」について、その内部が終助詞等に託される表出的なムードを帯びていれば直接話法に決まるという考え方を示しているが、これと通じる見方である。次に Wrona は代名詞などの転換子 (shifter) が間接話法の指標になるとして、間接話法の用例として (25) などを挙げている。この「…と」において、「我」は主節述語「告ぐ」の主体ではなく詠み手を指していると解されるので間接話法の用例と見て間違いない。そして、このように直接話法の確例と間接話法の確例はともに指摘できるものの、多くはどちらなのかが曖昧だとも述べている (p.301)。

Wrona の記述は明解で、上代語に直接話法と間接話法があったことの証明として成り立っている。また、どちらであるかが曖昧な用例が多いとするのも事実であろう。これを見る限りでは話法は現代も古代も同様に捉えることができそうである。この方面において、新たな問題提起がありうるのかどうか筆者には予想が付かない。

ただ、黒木ら (2008 b) が間接話法として扱う次のような表現はいささか興味を引く⁽⁷⁾。

- (26) [薫は] 忍びたまへど、御けはひしるく聞きつけて、宿直人めく男なまかたくなしき出で来たり。「[八の宮は] しかじかなん籠りおはします。御消息をこそ聞こえさせめ」と申す。(源氏・橋姫・5-137, 黒木ら 2008 b: 65 の (二四) に相当)

黒木ら (2008 b: 65) は「会話文中の指示詞 (傍線部) が、地の文の内容を承けている」とするが、この「しかじか」は、新編日本古典文学全集で「これこれの次第で」と訳されるように、発話の現場や前後の文脈のどこ

(7) 鈴木 (1971: 82-85) も話法の分類方法を考える中で、「しかじか」「かうかう」などを間接話法の指標と見ている。

かを参照するような働きは無い。実際、この用例において八の宮が山に籠る様子が描写されるのは、傍線部よりもかなり前の部分（29行前の「七日のほど行ひたまふ」か）であり、そこと照応しているなどという解釈をするよりも、山籠もりに至る事情など喋っている内容を端折って示すための形と見る方が自然だろう。念のため、現代語で考えておくことにしよう。

(27) 僕はいつも裏通りの突き当りを右折している。そう行けばすぐ
駅に着くと、太郎が教えてくれた。

2文目の引用句「…と」は自然な読みならば間接話法であり、そこに含まれる「そう」は直前の文の内容を指していると解される。こうした指示表現は、あくまで、直前の内容を承けるのが常だと思われる。従って、前文との間に別の文が一つでも入って来れば、次のように指示対象が読み取りにくくなってしまう。

(28) 僕はいつも裏通りの突き当りを右折している。昔はそこにタバコ屋があって分かりやすかったな。そう行けばすぐ駅に着くと、
太郎が教えてくれた。

(26) の「しかじか」は、現代語の「こうこう」「何々」などに類するものと解すべきだろう。熊丸（2005）は現代語におけるそのような形式をプレイスホルダーと呼んで分析しているが、それによれば、プレイスホルダーは引用語句の一部を引用者が伏せるような働きを持つものである。この点に注目すれば、間接話法を示す指標と見ることも可能かもしれない。しかし、先に見た通り、藤田（2000）・Wrona（2008）は終助詞などが現れうる引用句は直接話法に決まるという考えを示しており、これに従うならば、プレイスホルダーは次のように直接話法でも用いられるものであるから、間接話法であることを示す指標にはならない。

(29) 「あやしきことかな。しかじかこそありつれ。またなうねたくい
みじきことこそなかりつれ。『出づ』とて言ひおこせたりつる消
息よ。いかでこれに答せむ」と、もまれたまへば、…（落窪・
二・179）

- (30) 「そうですね、それはこうこうなのです」と私が言い、相手がたまたま直観型だったとすると、「そういうことだったのか。やとわかりましたよ」と答えるでしょう。(BCCWJ/カール・グスタフ・ユング(著)/入江良平(訳)/細井直子(訳)『ユング・コレクション』)
- (31) ある OB の方から、今度は、四月からこの部署はだれだれが担当になるよとというような話を後で現職の所員が聞いたりというようなこともあったというような話も聞いております。(BCCWJ/国会会議録)

では、「しかじか」等のプレイスホルダーが入っている引用句は話法の観点からはどう位置付けるべきなのか。また、古代語に存するプレイスホルダー用法の形式にはどのような種類のものがあるのだろうか。この点についての考察は今後の課題ではないかと思われる。用例収集に限界のある古代語よりも、まずは現代語において分析を深めておきたいところである。

5. 上代の「動詞終止形+と」に関する諸説

本節で見る次のような「と」は、動詞の終止形を承ける接続助詞相当のものであるが、従来、第Ⅱ類の「と」との区別が曖昧だった。本節ではこうした「と」に関する研究の現状を確認する。

- (32) あさりすと [求食為跡] 磯に住む鶴明けされば浜風寒み己妻呼ぶも (万葉・七・1198)

岩井 (1970: 367) は、このタイプの「と」について「動詞の終止形を直接受けるが、[中略] 意味上は「む」のあるに同じ」と述べて、「…む」と同義のものと見做している。この解釈は第Ⅱ類の構造として分析するものと言える。しかし、無論のことながら、生起していない助動詞「む」の存在を認めることはできない。

佐佐木 (1996: 186) はこうした「動詞終止形+と」を「後続する部分で

のべられる事態を生じた理由や原因を叙述するという形」とし、解釈に一定の幅があることを明らかにしている。その後、竹内（2005）によって詳しく取り上げられ、同一の事態を前件（描写の細密度が低い）と後件（描写の細密度が高い）とに配するものや付帯状況を示すものがあることが明らかになった。また最近でも、仁科（2016）は「と」の前後の節が表す事態の時間関係に着目して、「先-後」「同時」「後-先」の三通りの中で、どういった解釈が生じるかを考察している。吉井（2020）は前件の動詞の種類を記述し、また、前件と後件とに同一事態が細密度の差をもって現れる場合には、〈解釈-現象〉という関係が生じることを論じている。以上の研究の経過によって、こうした「動詞終止形+と」は引用助詞とは区別されることに加えて、後続節との意味的な関係も概ね明らかになってきたと言える。引用助詞と結びつけた捉え方をしようとするよりも、接続助詞相当の働き方がどういったものかを見極めるという方向性が重要ということだろう。

ただし、第Ⅱ類引用構文ではないと確実に言える用例のみに基づいて分析を行うのは、案外難しいことかもしれない。たとえば次の例を「鮎を釣っているのよとそこに立っている」のように解することは全く不可能と言えるだろうか。

- (33) 松浦川川の瀬光り鮎釣ると [阿由都流等] 立たせる妹が [多々勢流伊毛河] 裳の裾濡れぬ (万葉・五・855)

このように考えるとき、動詞終止形を承ける「と」を引用助詞と区別する客観的な基準をより明確な形で示すことが、まだ課題となっているように思える。

なお、吉井（2020）の示す〈解釈-現象〉という関係は、繫辞の「と」にも認めることができるかもしれない。

- (34) 辞別きて詔りたまはく、遠皇祖の御世を始めて中今に至るまで、
天つ日嗣と [天日嗣止] 高御座に坐して此の食国天の下を撫で
賜ひ慈び賜はくは、… (続日本紀宣命・五詔・13)

「天つ日嗣」は皇位のことである。波線部の、玉座から天下に恵みを施す行為は、皇位たることの一つの具体的な現れ方であろう。あるいは、玉座から天下に恵を施すという個別的な事態は、皇位であるという事態に比べると、細密度が高いとも言える。こういった繫辞の「と」が動詞終止形を承けるようになって、(32)のような「動詞終止形+と」の用法を生んだ可能性は無いだろうか。繫辞の「と」であれば、「たり」の連用形相当としてそこに「て」が付いた形が生じて不思議ではないが、実際、中古に入ると、やはり動詞終止形を承ける「とて」が本節で見た「と」に類する構造で用いられるようになる(拙稿2016c)。本節で見た「動詞終止形+と」は、繫辞の「と」の用法に由来するものと見てよいかどうか。その判断は今後の研究成果に俟ちたい。

6. 引用助詞以外の「と」との関係に関する説

「と」は引用助詞以外の用法も様々なものがあり、それぞれの間にどことなく関連性を感じる場合もあるかもしれない。そういった直観的な把握によって⁽⁸⁾、引用助詞「と」を他種の「と」と結びつけるような言説がいくらか見られる。

たとえば山崎(1965: 457-460)は、「となる」「とする」のような繫辞の「と」や、「雲霞と攻め上る」のような比喩に使われる「と」、「ありとあらゆる」などの同語反復に使われる「と」、「知恵と心と」のような並列の「と」などを挙げて、それらすべてが後接語の「内容」を示しているのだと言う。しかし、このような発想で全く異次元のものを集めて一絡げにすることが許されるなら、なにも「と」に限らずどんな助詞でも前接語を後

(8) 此島(1966: 74-75)は5節でみた「動詞終止形+と」や「(花が)雪と降る」のような比喩を表す「と」の例を出して、「この種の「と」は、引用語句の下に附く「と」と不可分の関係にあると思われるのである」とするが、肝心の「不可分の関係」とはどういったものであるかを示さない。

接語の「内容」と見ることが許されてしまうだろう。それこそ、「米を食べる」において、「米」は「食べる」の表す食事の内容だから、「を」は内容を表すとかいったことになってしまうだろうし、「太郎は学生です」も、「太郎」は「学生」の具体的な姿であり、「学生」の内容と言おうと思えば言えるから、「は」は「内容」を表すということになってしまう。山崎の考え方はこのような減茶苦茶な発想と特に変わるところが無い。おこがましい物言いにはなるが、文法論の本義というものがあるとするれば、それは、異なるものを無理やり結び付けて共通点を言い当てようとするようなことではなく、むしろ、一つの語が持つ複数の用法を根拠立てて分類したり、似た意味の語同士を比較して繊細に違いを探っていくことだろうと筆者は考える。

これから見る川端（1958）も、大部分は直観的な把握を述べたものに過ぎないようだが、山崎（1965）のような短絡的な結び付け方とは異なり、各種の「と」が派生していく様子を順に説明するものとなっている。その中には意外性のある発想もあり、重要な記述も一部見られる。全体としては無理な道具立てによって異質のものを強引に関係付けていく内容となっており、評価できる点は乏しいが、川端文法とも称されて一定の評価を受けて来たと思われる川端の論述が結局のところ失敗に終わっているという事実を確認することは、引用助詞「と」とその他の「と」とを結び付けようとするような発想の限界を考える上で、示唆を与えるものであろうと思う。

6.1 川端（1958）の「と」に関する説明の全体図

最初に、川端（1958: 2-16）に示される「と」についての記述の全体を俯瞰できるようにしておこう。扱われる内容が多く、また体系立っていて切り分けにくいので、以下の通りやや長めの要約となる。筆者なりの理解によって用語や表現を分かりやすいものに書き改め、概ね川端の論述の順序に従って記した。無理な論理を持ち出していると思える箇所には番号①～

⑧を付してある。これらについては次項 6.2 で批判的に検討する。なお、川端は他に「附説」としていくらかの議論を付け足しているが、「と」そのものの各用法の把握は以下の全体図に収まっているようなので、「附説」については省略した。

〔Ⅰ〕 雪降ると花降る

・前句「雪降る」と後句「花降る」の合一

〔Ⅱ〕 〈1〉 雪□□と花降る

・後句「降る」と的作用的類似のみを背負う「降る」が解消①

〈2〉 夕闇とかくりましぬれ

・前句が一語で果たされる場合

→ 〈2'〉 ひしと鳴る

・後句の〈さま〉を修飾限定する情態副詞

〔Ⅲ〕 花雪と降る

・「雪」が「降る」と格関係を絶ち、「雪=花」となる②

ex. 天皇の遠の御門と韓国に渡る

〔Ⅳ〕 〈1〉 花を雪と（降る）

・「花」も「降る」と格関係を消極的にした③

・「を」は「花」と「雪」の一致認定の性格を負わなければならない

ex. 鳥をも家と住む

〈2〉 花を雪と + 述語動詞（思ふ・見る・言ふ etc.）

・「を」は話し手が「花」について“知る”ことを成立させる契機であり、述語動詞の格支配を示すものではない④

※ “知る”とは、個物（花）と第三項（雪）とを主賓関係で結ぶこと（第二項は話し手）

・述語動詞は「を」を収めるべき語として顕在する⑤

ex. 旅行く我を海人と知る

- ・第三項は名詞に限らなくなる

ex. 旅をよろしと思ひつつ

〔V〕 (1) 何を怨しき所として

- ・「す」は「思ふ」「見る」などに分化する可能性を含む表現
- ・統覚の作用である「…を…とす」が形式として現れたもの

(2) 世の中は空しきものとあらむとぞ

- ・IVやV (1) に先行して存在した命題を文的事態に設定

〔VI〕 「花(雪) …」と+述語動詞

- ・〔IV〕で、「花」と「雪」が主述関係を持つことが契機となって生じる形
- ・述語動詞の“知り方”を示す部分の働きが積極化して、「と」がそこに付属し、改めてその内容を設定するようになる

ex. 我こかなりと誰か告げけむ

〔A〕 時間的先後の関係

形式 「内容」と(想定される引用語)て〔後句〕⑥

- ・想定される引用語の意味する言語手段は文脈的に自明
- ・「内容」に「とて」が付いた形と後句の関係が一義的であれば、引用語は「言ふ」
- ・「内容」と後句の関係が一義的であれば、引用語は「思ふ」

ex. 「…これ見よ」とて今片つ方に写れる影を見せ給へば

〔B〕 因果性の関係

- ・引用語が「思ふ」であるとき、「内容」は主体の内部にとどまって顕在しない。顕在しないことに積極的意味があり、後句との間に因果的關係性を持つ。

ex. とぶらはむとて五條なる家たづねておはしたり

- ・「思ふ」は消極的にしか想定されず、「て」も積極性を持たないので、「て」が無い形もある。

ex. もとのごと家はあらむと玉櫛筒少し開くに

〔C〕判断とその対象の関係

(イ)「内容」は主体の意志(判断), 後句(対象)はその実現

ex. みやびをの遊びを見むとなづさひぞ来し

(ロ)「内容」は言語主体の推量⑦

ex. 風をだに来むとし待たば

・後句の全体が主辞, 前句は判断賓辞

・前句と後句の意味内容は同次元的な叙述性を保ち合う

(ハ)同次元的な叙述性の保ち合いを契機として, 推量を非推量の表現として示すもの⑧

ex. をとこさびすと唐玉を手元にまかし

・前句と後句は, 同一時間上に属し, 事柄として一致する

・(イ)(ロ)のように意志・推量表現が無いので, 引用語も想定できない

・〔I〕は(ハ)の特殊な場合である。

〔I〕から〔VI〕まで順番通り用法が派生していく様子が描かれているのだが(〔IV〕から〔VI〕へ飛ぶ点を除く), 〔I〕は最後の〔VI〕〔C〕(ハ)の特殊な場合だとのことであるから, 〔VI〕まで行くとまた〔I〕へ戻るといふ循環が発生する。それゆえ川端(1958: 16)も「本稿はどこから始められてもよかつた」などと述べているのだが, ある語の複数の用法の間に派生関係のネットワークがある場合に, そのような循環を想定するのは珍しい。多義的な語に関して, こういった循環が理論的にあり得るかどうかは考える余地があろう。ともあれ, 循環を想定するならば〔I〕~〔VI〕の間を繋ぐ派生関係は共時的な現象として示されていることになる。もし, 一部に通時変化を描写しているのだとすれば, 〔VI〕から〔I〕に戻る際に, 過去の時代にタイムスリップしなければならないからである。見る限り, 大部分は上代の「と」の用法だけでカバーできるから大きな問題は生じないし, 〔VI〕〔A〕に中古以降の形式である「とて」を位置付けてある

のは、中古でも〔Ⅳ〕〈2〉あたりが残っていて、そこから「とて」が派生すると見ておけば良いのかもしれない。

6.2 問題点の指摘

以下で①～⑥に関する問題点を指摘していく。

①に関して。〔Ⅰ〕の「雪降ると花降る」のような表現がまずあって、「と」は前件と後件の合一を示す働きがあるという考えが先立って提示されている。そして、前件の「降る」は後件の「降る」に対する「作用的類似」を背負っているに過ぎないから消えるのも自然、という考えが示されているのだが、従属節内の述語が後接する接続助詞だけを残して消えるような現象は考えにくい。たとえば「私は料理に砂糖を足して、水を加えた」のような表現で、前件の「足し」はいくら後件の「加え」との間に「作用的類似」が見て取れるとしても、そこから消えて「私は料理に砂糖を、水を加えた」のような形になることはありえない。他の表現を色々出して考えてみても同断であろう。〔Ⅱ〕の「雪と花降る」が〔Ⅰ〕から生じると先に決めつけてしまえば、従属節内の動詞が消えるというような説明がどうしても必要になるだろうが、無理なことに思える。

②③に関して。このあたりでは格関係を絶つとか消極的にするというような変容過程が示されているが、そうした変容についてどういう現象なのかの説明が無く、また類例も挙げられていないので、やはり①同様のアドホックな案に見える。また、もともと述語の支配を受けていた格成分が格成分でなくなるようなことがあるとしても、共起している他の名詞と「一致」などという関係を結ぶことがどうして起こるのかが分からない。②で川端は、「格関係を絶ち、絶つことの反面としてその体言資格においてb〔辻本注：「花」のこと〕の体言部分へ或る一致を結ぼうとあらわれるのも亦、自然であろう」(p.4)と述べるが、なぜ「自然」と言えるのか、不明である。

④⑤に関して。川端の考えでは、「山をよすがとぞ思ふ」などの「を」

は「思ふ」に対する格標示に用いられたものではなく、「山」について知ろうとするような話し手自身の精神的働きが生じる契機を標示するものだというように他で聞かれない奇妙な発想を急に持ち出すのはなぜだろうか。普通の見方をすれば「山を」は「思ふ」の支配するヲ格成分であろう。川端が奇妙な見方を持ち出すのは、おそらく「鳥をも家と住む」のような表現を「…を…と思ふ／見る／知る」という構文の発生源だと先に決めてしまったためである。予め用意した帰結に向けて拵えた無理な空想なのである。そもそも川端自身、⑤において「思ふ」等を「収めるべき語」(p.7)と言っているが、「収める」とはとりもなおさず格支配するというのではないのだろうか。

⑥に関して。中古語の「とて」の捉え方として、「と」と「て」の間に「言ふ」「思ふ」が想定されるという図式が示されているが、そのような捉え方には無理がある。川端が「言ふ」と「思ふ」を「想定される引用語」と名付けているところの、「想定される」とは文法論的にどういう現象を言っているのか分からないし、解釈上、「とて」が発言内容か思考内容の引用に概ね限られてくるのは事実としても、それは「と」と「て」の間に「言ふ」「思ふ」という動詞を想定する”ということとは異次元のことである。かつては「とて」を「と言ひて」「と思ひて」の省略形だと見る向きがあったが、川端もそれと同じような考えを持ったのであろう。拙稿(2014)で詳しく論じたように、もし「言ふ」「思ふ」がそのような形で伏在するなり想定されるなりするのであれば、そこに係っていく修飾成分や格成分が「…と」以外にも生じてよいはずであるが、そのようなことは起こらないし、「言ふ」や「思ふ」が「て」の直前で消えたりする現象も確認されていないので、「とて」を「と言ひて」や「と思ひて」と等し並みに扱うのは不適當である。

⑦⑧に関して。川端は(イ)において「後句の行動主体の意志」(p.14)が引用される引用構文として「船乗りせむと月待てば」などの例を挙げており、これは第Ⅱ類の構造を例示しようとしたものとして理解しておけば

問題無いのだが、(ロ)では「思いの意志の一人称性に後句の行動主体の人称が一致しない」として、次の例を挙げ、「思いとはまた、言語主体の推量的事態たらざるを得ない」(p.14)という解釈を述べている。

- (35) …いかにあらむ年月日にかつつじ花にほへる君がにほ鳥のなづ
さひ来むと [名津匠来与] 立ちて居て待ちけむ人は… (万葉・
三・443)

この用例は「どんな日に息子が帰ってくるだろうと、立ったり座ったりして待っていたであろう母親は」のような意味であり、「…と」には母親の心中の言葉が引かれている。「…と」の内部における一人称は息子であり、後句の一人称は母親であるから、確かに川端の言う通り人称は「一致しない」ということになるが、なぜ、「…と」の内容は「言語主体」つまりこの歌の詠み手 (=伴三申という人物) の推量にならざるを得ない、という話になってしまうのか。わけの分からない考えである⁽⁹⁾。川端がこのように意味不明のことを書く理由は何かと言えば、やはり、すぐ後の(ハ)で示される「動詞終止形+と」へと繋ぐためだろう。「動詞終止形+と」は地の文相当であるから、これの派生元を引用構文だと断ずるためには、引用句「…と」の内容が地の文相当に切り替わるという話を作っておくと都合が良い。川端は「同次元的な叙述性の保ち合い」なる表現によって、引用されている発話内容が地の文と引き合って同化するかのごとく言うが、そのような事例は他にあるだろうか。引用句が間接話法にでもなれば、そこに含まれるダイクシス要素が地の文と同じ秩序において解されることになろうが、それでも「…と」という形の中に引き込む以上は、元発話者の言葉の再現として提示されるのであり、引用者自身のオリジナルの言葉に切

(9) (35)は挽歌であり、部竜麻呂という人が皇族警護のために母親のもとを離れた後、母親が竜麻呂の幸福を神に祈りながらそわそわと帰還を待つ様子と、その一方竜麻呂が多忙を極める中で自死を選んだという内容が詠まれている。待つ母親と命を絶つ息子との間の対比を読み取るべきであろう。となれば、「にほへる君がにほ鳥のなづさひ来む」という、息子への情愛と期待に満ちた言葉を、母親の思惟でなしに作者のナレーションと解する余地がどこにあるか。

り替わるわけではない。川端のような見方を維持するためには、「同次元的な叙述性の保ち合い」などというよく分からない奇妙な一言で終わらせず、根拠立った詳しい論述を示すことが不可欠だが⁽¹⁰⁾、はたして可能だろうか。

以上の通り、川端の所論は、ある用法と別の用法とを無理やり繋ごうとして、その都度アドホックな道具立てに頼る部分が随所で目立つ。全体として、とても維持できる説とは考えられないものであろう。しかしこれまで特に批判されることも無かったし、これだけの分量の論述であるにも関わらずその内容が言及されることも殆ど無かった⁽¹¹⁾。それはやはり川端の文章の難解さゆえのことかと思う。

6.3 評価すべき点

以上、本節では川端（1958）に対する批判が中心となったが、川端の考えは部分的には評価すべき点も見出せる。たとえば、〔VI〕〔C〕（ハ）では「動詞終止形+と」において地の文の要素が現れていることを指摘し、後件との意味論的關係を“同一時間上に属し、事柄として一致する”としているのは、後に竹内（2005）や吉井（2020）で詳細に論じられる興味深い現象の大枠を先んじて言い当てたものであり、卓見だと思う。またここ

(10) 森重（1950: 23）は次のように「…と」に後続する述語句が非情物を主体とする用例を掲出し、「後行句全体のあらはす事態に対する言語主体の推量的判断を表現してゐる」とする。

（i）天皇の御代栄えむと〔御代佐可延牟等〕東なる陸奥山に金花咲く（万葉・十八・4097）

しかし、単なる擬人法か、あるいは拙稿（2022 a）で分析した特殊な引用句の用法の可能性も考えられる。

(11) 藤田（2014: 8-9）は川端（1958）について「引用の助詞「と」及びそれに連なる「と」の表現全般を視野に入れ、そうした「と」の本質を、「と」を介して結びつく二句の“合一指定”（同等・等価のものとしてとらえて結びつけるといったことと解せられる）という見方で統一的にとらえようとしたものである」と述べ、引用構文のシンタクスを考える上での意義を認め、その影響を受けたとしているが、これ以外に川端の考えと向き合っただけで積極的に継承ないし批判しようとしたものは管見に入っていない。

で批判しなかった部分も、実証性には欠けるが、必ずしも否定できるものばかりではないように思える。たとえば〔V〕〔VI〕のあたりで論じられるような、「…を…と+述語」の構造から「…を」が消えて引用構文「…と+述語」が生じる経緯⁽¹²⁾は、2.3 で見た Frellesvig (2001) による引用構文の起源の推定とも通じる。

川端の文章は読みにくく、読み手に複数の解釈を許す可能性がつきまとう。今後も、古代語における「と」の諸用法を有機的に結び付けるような考察が行われる際には、やはり川端 (1958) の案を参照することがまだ必要だろう。

7. ク語法が導く引用句に関する諸説

以降の7・8節では、引用助詞「と」と密接に関わって現れる要素に関する研究を見ていく。これによって「と」自体の性質を考えることにもなるだろう。最初に検討するのは、「いはく…と (いふ)」「まうさく…と (まうす)」などの、引用句「…と」を導き出すように使われる「ク語法…と (+述語)」についてである。

「ク語法…と (+述語)」が漢文訓読で多用される事実はよく知られており、そのためか訓点資料の用例に関しては注意すべき研究がいくつかあるのだが、先に、訓点資料以外での用例についての研究例を見ておこう。

7.1 訓点資料以外の用例

和文資料の「ク語法…と (+述語)」を扱う研究は、概して用例が一定量得られる竹取物語に注目しており、「いふやう…といふ」などといった類

(12) 森重 (1950: 15) も、「…を…と見る」などの認識動詞構文において「…を」が「…と」内部の述語に対する主語としての性格と、「…と」の後の述語動詞に対する客語としての性格を有することを認めた上で、前者の性格に限定されていくことで助詞「を」が消失する、との見方を示している。

似の表現のバリエーションに関心があるようである。遠藤 (1936)・三橋 (1955)・萬羽 (1977)・黒木ら (2008 a) などを見れば、竹取物語に「いはく…といふ」のように同じ述語動詞を反復する形の用例が多いことなどが分かる。あるいは遠藤 (1963) のように、三宝絵詞に見られる用例の状況をまとめているものもある。こうした研究がいくつもあるのは、現代語では用いられないク語法や「…やう」などが目を引くためであろうが、古典を読む者であれば誰でも知っているク語法の調査をわざわざ行うならば、その結果から未知の新事実を帰納しなければ意味があまりないように思う。しかし残念ながら、遠藤 (1963: 14) が「三宝絵における会話の引用形態がほぼ明らかになったと思う。この形態がどういう意味を持つものかは、そう簡単には言えない。」(p.14) とするように、得られたデータをもととして日本語学的な考察に踏み込むのは難しいようである。

その中で滋野 (2011: 13) は、「いふやう…といふ」のように「やう」を用いて引用句を導くものは会話内容の引用に限られるのに対し、「いはく…といふ」などク語法を使う形は会話文だけでなく書かれた文章を引用するのにも用いられるという点を指摘している。ここからは、ク語法によって導くことのできる引用句のあり方には何の制限も無いのかといったことが次の課題として見えてこよう。ただそうした調査は、ク語法の用例が大量に得られる訓点資料においてなされるべきものと思う。

7.2 訓点資料の用例

次に、訓点資料の用例に関してこれまで報告されている事実を確認したい。

築島 (1954: 44-45) は、「いはく…といふ」のように述語を繰り返す形が元来のものであるとし、後世に文末の「いふ」等が消えた「いはく…と」が使われるようになるという変化を指摘している。手短な記述だが、以降の研究を見る限り、大局的な把握としてはこれで問題ないようである。

稲垣 (1966) は平安初期から院政期までに加点された 8 種の訓点資料の

調査を行っているが、その結果を見る限り「いはく…と」のように結びが引用助詞「と」だけとなっている用例は殆ど無いらしい。また、「といふ」等の結びが現れやすい資料と現れにくい資料とがあるが、それは資料ごとの個別的な性格に起因しているようで、加點年代との関係は見えない。

大坪(1981: 924-928)でも、稲垣と同様の調査の結果が示されるが、大坪は10種の訓点資料を「経」「論疏」「紀行・伝記類」に分類してそれぞれの傾向を見ている。それによれば、加點の詳密な「経」の類では「といふ」等の結びが多用されるが、平安末期加點とされる妙法蓮華経(龍光院本)だけは結びが全く用いられない。加點が疎略な「論疏」の類では結びが無い用例も早くから多いが、平安末期加點とされる成唯識論(石山寺本)に至っても結びがある用例は少なくない。全体として、「といふ」等の結びの用例は次第に減少していくようだが、やはり個々の加點者の方針に左右されているように見える。

築島の言うように「といふ」等の結びがあるのが元来の姿だとすれば、やはりそうした用例が古い時期ほど多くなるのだろうと想像されるのだが、稲垣・大坪の調査を見る限りではそのあたりがはっきりしない。「いふ」等の述語動詞が消えてもつばら「いはく…と」という形に収斂していくのは中世以降のようであるから、古代語研究の側で行うべきはやはりそこまでの過程を細やかに記述する作業であろう。

また、大坪のデータでは成実論(4巻分)において「いはく…といふ」式が57%と少なくないが、稲垣のデータで成実論(巻十二)を見ると、「いはく…といふ」式は7%程度のものであり、同じ資料でも、異なる巻では異なった傾向のデータが出るらしい。ただし、用例採取の基準の違いに拠るのかもしれないし、稲垣・大坪の調査した巻がたまたま極端な傾向を示しただけかもしれない。

そのあたりのことを踏まえるに、平安時代の訓点資料をなるべく多く、かつ細やかに(巻ごとに見るなど)用例の分布状況を観察して、経時的な変化があるかを調べる必要がある。

表1 成実論の「いはく」の用例分布

巻	「いはく」に対する結び			合計
	といふ(※)	と	φ	
十一	3	1	3	7
十二		2	2	4
十三	1	2	11	14
十四	1	1	10	12
十五	1	2	6	9
十六	1		5	6
十八	1	2	11	14
二十一	2		23	25
二十二	2	1	25	28
二十三	3	2	8	13
合計	15	13	104	132

※「といふ」は「とまうす」等も含む。

表1では、成実論における「いはく」の用例を筆者が観察した結果をまとめてある。調査に際しては、「言」「曰」「謂」の3字のみに着目して、訓点によってク語法であることが明確に読み取れる用例だけを抽出した。結びとなる「といふ」等の語も、解読文の通りに抜き出した。

もし築島(1954)の言うように「いはく…といふ」型で同じ動詞を繰り返すのが本来的な形であるとすれば、平安時代初期の訓点が付いた成実論からは「といふ」等の結びの用例が一定量現れることが期待されるはずである。そこで、表1によって巻ごとに見てみると、各巻に弱いながらも「といふ」等の結びが示される傾向が認められる。成実論の加点者は「いはく」に対して「といふ」等を呼応させるという意識を深層のところで抱いていたと見てよいようである。用例の数量が少ないのは、大坪の言う通り論疏の類では加点が粗くなるためであって、実のところ「といふ」を補って音読していた可能性の方が高いのではないだろうか。

ともあれ、できるかぎり細やかに訓点資料の用例を観察することが必要

である。稲垣や大坪の調査の後に公表された解説文も少なくないことを考慮するに、「いはく」等のク語法の結び方を改めて調査してよい頃合いであろう。

7.3 先行研究における文法論的な説明

現状として、「ク語法…と+述語」の構造を文法論的観点から検討対象とした先行研究は乏しい。しかし、「と」を含む述語句に対して頻繁に共起するク語法の文法論的位置付けを考察することは、「と」の性質を考える上でも意味を持つ可能性がある。以下ではまず管見に入った築島(1954)・橋本(1978)・大坪(1981)・宇都宮(1982)の見方について順に検討していこう。

築島(1954: 44)は「いはく…といふ」という形において、「いはく」は主語⁽¹³⁾、「…と」は目的語、「いふ」は述語になっているとする。主語に立つということは、「いふ」の表す発話の主体、すなわち多くは人間を意味することになるが、ク語法が人間を表すような事例は知られていないのではないだろうか。また、築島自身の挙げる「王陵が曰(はく)」のような用例において、これを「…といふ」の主語として訳出しようとするれば、「王陵が言っている、その人(王陵)は」とか、「言っている王陵は」とかいったような、妙な表現にしかならない。日本語の文は「主語+目的語+述語」という語順になりやすいのは確かだが、それをそのまま「いはく…といふ」に重ね合わせるだけの見方は無理が大きい。

橋本(1978: 356)は「引用句自体は文脈中において体言相当であるが、それに見合う体言的価値をもつ句を行為の側面を表わす意味でまず提示しながら、続いて同じ行為の内容の側面を表現するのに備えたのがこのク語

(13) 後に築島(1963)では「問題もあることと思はれる」としつつ、「いはく」等を陳述副詞として扱い(p.533)、また「主語とも見得るし、又連用修飾語とも見得よう」(p.768)として、連用修飾語の可能性を考慮するようになっていく。

法である」とする。つまり「と」が付いた引用語句とク語法は共に体言だという考えなのだろうが、引用句「…と」は連用修飾語であって体言ではないので⁽¹⁴⁾、その点でまず誤った見方をしている。また仮に、体言を2つ並べる構造になっているのだとしても、行為の側面と、行為の内容の側面とが並ぶような言い方は、少なくとも現代日本語では作り出しにくい。それが古代で可能だったとも思えない。

(36) ??挨拶「おはよう」を言った。

(37) ??後悔「やめておけばよかった」が脳裏に浮かんだ。

大坪(1981: 934-937)は、延喜式祝詞などにおいてすでに「いはく…といふ」式のク語法の用例が多数見えることなどから、これを「国語固有のものであらう」とし、引用内容が長くなる場合にその始まりを示すために生じた形式だとする。穏当な記述ではあるが、引用内容の開始点を示す必要性があったとして、なぜその役割をク語法が担い得たかについては触れていない。準体法の「言ふ(は)」など、それを担い得た形は他にもあっただろうから、体言相当であるはずのク語法を“無理やり転用させる”理由も無かったはずである。「イハクは、「引用句+トイフ」に係る一種の連用修飾語と見られる」(p.939)とは述べられているが、ここで言う「連用修飾」とはどういったものかを突き詰めて考える必要があろう。

宇都宮(1982)は一応、その点に言及している。すなわち、「「云フ」にク語尾をつけることによって体言化し、「云フコトハ……(デアル)」と訓読することもあった」(p.43)というのが「いはく…」の構造だとしつつ、「実際には「云フコトハ…デアル」式に訓読されることはなく」として、「いはく…といふ」式の語法が生じたということ、それゆえに「云フコトハ」が主語の位置に立ちえず副詞になるというようなことを論じている。「いはく」を連用修飾語と見るのは大坪と同様で、体言で主格相当となるはずのク語法が連用修飾語に変容する経緯を説明したものとなっている。

(14) 藤田 2000: 73 にあるように、現代語の引用句「…と」は連体修飾を承けないので、名詞的な成分とは考えられない。これは古代語でも同様である。

しかし、この考えには従いがたい。「云フコトハ……（デアル）」の意で訓読できたのならば、そういう名詞述語文の実例がどこかにあっても良いはずだが、そうした用例は管見に入らない。また、「いはく」が現代語の「云フコトハ」と同等の働きをするのであれば、「いはくは」のように主題の「は」が付く用例があっても良さそうなものだが、極めて少ないようである⁽¹⁵⁾。それに加えて、「いはく」が主語相当の名詞として文頭に置かれるのだとすれば、たとえば「といふことなり」のように名詞句で文末を結んでコピュラ文的な型を整えた形など、文法的にもう少し自然と感じられるような形式が生じる余地は十分にあったのではないだろうか。文末に「といふ」が来るのは、「いはく」に対する結び方として特段不自然な点が無いからであり、本来的に主語相当ではない働きを担っていた可能性を模索する必要があるだろう。宇都宮は「ク語法…と+述語」を「漢文の訓読から生れた語法」(p.43)とし、「といふ」という読み添えが採用されたことの結果として「いはく」が副詞化せざるをえなかったという見方をするが、大坪(1981: 934-936)が列挙する数多くの「ク語法…と+述語」を見る限り、上代語ですでに「のりたまひしく…とことよさしたまひて」「いはく…といぎなふ」「おもほさく…といなびまうせり」など豊かなバリエーションがあったわけで、平安時代から本格化する漢文訓読の中で翻訳文法として生じたイレギュラーな形だとは考えにくいように思う。

7.4 別案

さて、前項では先行研究において「ク語法…と+述語」の文法的構造がどのように扱われているかを確認し、批判的に検討した。結局のところ、大坪(1981: 934-937)が示すように、「といふ」等の結びと呼応して現れるのが上代からの日本語固有の形であり、このようなク語法は連用修飾語のように働いているらしい、という点を認める以上のことはできなかった。

(15) 佐佐木(2007: 17)は続日本紀宣命における聖武天皇の詔に限って、「おもほしめさくは」など「は」が付くク語法が4例現れるとする。

一般にク語法は体言を作り出す形だと考えられていることからすれば、連用修飾語のような働き方をすると、という点については十分な説明がなされているとは言えない。そこで、本項では筆者なりの分析案を示して、是非を問うこととしたい。

ヒントとするのは、佐佐木（2007: 11）が「興味深い実例」として掲出する次のク語法の用例である。

- (38) …引き放つ矢の繁^くけく [箭之繁計久] 大雪の乱れて来れ… (万葉・二・199)

これについて佐佐木は「言はく」「語らく」などと表現した直後に、「言ふ」「語る」の具体的な内容を提示するような用法から派生したもので、「繁し」と描写することのできる内容を、具体的に「大雪の乱れて来たれ」と比喩的に述べたものだろう（pp.11-12）と説明している。つまり本節で見ている「ク語法…と+述語」は「ク語法+ク語法の具体的な内容」という構造であり、それが転用されたのが（38）で、意味としては「矢の多さは、大雪が乱れるかのようだ」のように解されるということである。転用の方向がこれで良いかという疑問があるが、「ク語法…と+述語」と類似する構造が見出されるところに注意したい。

（38）において、ク語法の後の述語句はク語法による名詞節に対しては連用修飾語相当の意味合いで関わっている。すなわち、「大雪が乱れるように、放たれる矢は非常に多い」という意味合いの文において、「大雪が乱れるように」に当たる連用修飾語が後置されて述語文の形態を取り、残りク語法で名詞節にまとめられて文頭に立っていると見ることができなだろうか。というのも、「こと」による名詞節では上代語においても平安初期の訓点においてもそうした構造の用例が見られるのである。

- (39) 然れども今は君と坐して御^{あめのしたしらしめ} 宇す事 [御宇事] 日月重なりぬ [日月重奴]。(続紀宣命・二十五・46)

- (40) …掛けまくも畏き天皇が大御髪を盗み給はりて、きたなき佐保川の髑髏に入れて大宮の内に持ち参入り来て、厭魅 [=呪殺]

為ること〔厭魅為流已止〕三度せり〔三度世利〕。(統紀宣命・四十三・84)

- (41) 身の色は光り明にして常に普ク照(し)たまふこと、譬(へば)鍔^{ツカ}せる金の妙にして無比なるが如し。(金光明最勝王經・西大寺本・80-5)
- (42) 当に説(くべし)、是(の)時(に)、火の中に、八大鬼出(づ)こと有(り)。身黒きこと墨の如し。(大智度論・843-16)
- (43) 時(に)、彼の住處水を去れること玄^{(は)るか}に遠(く)シて、毒虫を畏る。(四分律・433-15)
- (44) 汝、是從(り)東に行ケ。此コを去ること五百由旬して城有(り)。(大智度論・778-19)

これらの「…こと」は、後続節の主語とは解しがたい。主語と取る場合、(39)ならば「世を治めることが、月日が重なった」のように訳されることになるが、このように捉えるよりも、「何か月もの間、世の中を治めた」のような意味の構造と解す方が自然であろう。(40)でも、「呪殺することが、三回した」のような訳ではなく、「三回、呪殺を回った」のように訳すべきだろう。

現代語においても、古代より制約はあるがこうした構造を作れる。

- (45) 普通電車で揺られること1時間二十七分、ようやく上野駅に着きました。(BCCWJ/青山健熙助『現代』)
- (46) だいたい、「百パーセントの信頼」といえば聞こえはいいが、じつのところ互いに手かせ足かせをはめ合っているようなもの。息苦しいことこの上ない。(BCCWJ/斎藤茂太『1分間でやる気を出す200のヒント』)
- (47) 譜代の重用を望む彦左衛門にしてみれば、新参者に幕閣を牛耳られて、苦々しいこと限りありません。(BCCWJ/米村圭伍『紀文大尽舞』)
- (45)で、「普通電車で揺られること」は「1時間二十七分」に対する主語

なのではなく、「1時間二十七分、普通電車に揺られる」という文を組み替えたような意味構造で理解するべきであろう。(46)(47)は慣用的な形だが、これらも同様のことが言えて、意味的には「この上なく息苦しい」「限りなく苦々しい」とほぼ同等である。

このような組み替え操作は分裂文の場合にも想定されることであるから、特に無理のある発想ではないだろう。砂川(2007: 21)が「分裂文とは、主語が節で構成され、述語がその節から取り出された特定の成分によって構成される次のようなコピュラ文である」と規定するのに従うと⁽¹⁶⁾、(39)～(47)は、「…こと」をコピュラ文の主語と解せない点を除けば、分裂文と同様の意味構造を見出すことができる。以上に見たような「…こと+述語句」の形をコト特殊構文と呼んでおくことにしよう。

さて、コト特殊構文の特徴を2点挙げておきたい。

1つ目は、「…こと」に提題助詞「は」がほぼ付かない点である。現代語で、次のような表現が不自然になるのも同様である。

(48) ? 研究に打ち込むことは13年、ようやく博士号を取った。

2つ目は、次のようにコト節内に助動詞「む」が現れると、後続節でもそれに対応して「む」が現れるという点がある。

(49) …髪を剃り袈裟を被服セラムヲ障礙して種種に驅使せむこと諸の僕庶に同ジ(く)せむ。(地藏十輪經・東大寺図書館本・78-1)

(50) 我レ今彼の尊者を讚歎(せ)むこと、皆往昔の仙人の説の如クせむ。(金光明最勝王經・137-13)

以上の点からコト特殊構文の統語構造についてどのようなことが言えるかについて、現段階では特に考えは無いが、次に見るようなク語法の性質と共通すると見られる点で注意したい。

先に佐佐木(2007: 11)から引いた「矢の繁けく大雪の乱れて来れ」と同

(16) 砂川の言う「分裂文」は、黒田(1998: 33)では「疑似分裂文」と呼ばれている。黒田は次のように格助詞が現れるものを「分裂文」と呼ぶ。

(i) 太郎が花子に渡したのは林檎をだ。(黒田1998: 33の(120))

様の解釈が可能なク語法の用例を挙げよう。

- (51) このころの恋の繁けく [恋乃繁久] 夏草の刈り払へども生ひ及くごとし (万葉・十・1984)
- (52) 恋しけく [恋家口] 日長きものを逢ふべかる夕だに君が来まさざるらむ (万葉・十・2039)
- (53) 一目見し人に恋ふらく [人尔恋良久] 天霧らし降り来る雪の消ぬべく思ほゆ (万葉・十・2340)
- (54) 妹が目の見まく欲しけく [見卷欲家口] 夕闇の木の葉隠れる月待つごとし (万葉・十一・2666)
- (55) 石走る垂水の水のはしきやし君に恋ふらく [君尔恋良久] 我が心から (万葉・十二・3025)
- (56) 心をし無何有の郷に置きてあらば藐孤射の山を見まく [見末久] 近けむ (万葉・十六・3851)
- (57) …引け鳥の我が引け往なば泣かじとは汝は云ふとも山處の一本薄項傾し汝が泣かさまく [那賀那加佐麻久] 朝雨の霧に立たむぞ… (古事記歌謡・4・40)

(51) は「夏草が刈り払っても一面に生えてしまうように、私の恋は盛んだ」、(52) は「長らく恋している」、(53) は「降ってくる雪が消えるようにはかなく私は一目見た相手に恋をしている」、(54) は「まるで月を待つときのようにあなたと会いたい」、(55) は「私の心の底からあなたに恋をしている」、(56) は「近くで見erだろう」、(57) は「朝露が霧となって立つようにはあなたはお泣きになるだろう」というような意味で捉えられる。いずれも、ク語法の後に来る述語句の意味内容が、ク語法内部の述語句に対して連用修飾語相当で係っているような解釈ができる。コト特殊構文と同様の意味構造として捉えられよう。

それと同時に、コト特殊構文において指摘した2つの統語的な特徴も見取れる。すなわち、(38) (51)～(57) のいずれも提題助詞「は」は付いていないし、(56) (57) における波線部は「む」のク語法に呼応して後続

節でも「む」が現れている。

(38) (51)～(57) のようなク語法の用例は他には見出せていないが、以上によってク語法がコト特殊構文とほぼ同じ統語構造を持つ可能性は示されたものと思う。

ここで話を戻すと、「ク語法…と＋述語」の用例においても、やはりコト特殊構文や (38) (51)～(57) のク語法と同様の統語的特徴が報告されている。すなわち、大坪 (1981) が「ク・ラクを伴ふだけで、更にその後、係助詞ハを伴ふことはない。」(p.918)「動詞が推量形・過去形・完了形を取る時は、引用句の後に添へる動詞も、同じ時制を取るのが古例である。イハマクートイハム・トイハバ、イヒシクートイヒキ、オモヘラクトオモヘリ、イヒツラクトイヒツ等のやうに。」(p.920)と指摘しているのである。

コト特殊構文と同質的なものと目されるク語法の用法がきちんと主節に文末述語を備えた形で使われることを考慮するに、その一環として引用表現の「ク語法…と＋述語」が用いられ、固定的になったとするのは無理のない考えであろう。すなわち、「ク語法…と＋述語」という形は「…と＋述語」という形の中から副詞的な成分である「…と」が後置されて、残った部分をク語法でまとめた後、後置された「…と」を述語文の形に整えた表現だったのではないだろうか。

なお、「恐らくは」「願はくは」なども類似の構造を取るク語法だが、こちらは提題助詞「は」が付くことや、後続節を再び「恐る」「願ふ」やそれと類義の述語で結ぶような用例が見出しがたい⁽¹⁷⁾こと、やや時代は下るが次のように後置される要素が「…ことを」という形になる用例もあることから見て、「ク語法…と＋述語」とは構造が異なっており、黒田 (1998: 33) の言う分裂文に近いものだったかと思われる⁽¹⁸⁾。

(17) 訓点資料における「恐らくは」「願はくは」の実態については拙稿 (2019: 49-51) で示した。

(18) 近藤 (2000: 377) は、「現代語研究でいう分裂文に該当するかどうか問題は、

- (58) 恨(む) ラクハ吾(が)輩老朽^{キウ}して恐(る)ラクは見不(ら)む
ことを。(大慈恩寺三蔵法師伝・興福寺本・延久承暦(1069-1081)頃
 点・15-6)
- (59) 庶(は) クハ發揮ヲ有ラムコトヲ。(大慈恩寺三蔵法師伝・興福寺
 本・1099年点・267-5)

現代語における引用構文は引用句「…と」を後置させた分裂文を作ることができないことが知られているが(中右 1973: 112), 古代語においても同様である(拙稿 2017 d: 16)。

- (60) *僕が思ったのは、「もう春が来た」とだ。(中右 1973: 112 の(31
 a)に相当)

概して、動詞の必須成分として文に生起する連用修飾語は、分裂文の述語にすることが難しいようである。

- (61) a. 太郎は手品師として有名になった。
 b. ??太郎が手品師としてなったのは、有名にだ。
- (62) a. 弊学では若手教員の負担を軽くしました。
 b. ??弊学で若手教員の負担をしたのは、軽くです。

古代語の引用構文において、引用句の始まりを明示する目的で「言ふ」等の述語を文頭付近に持って来る際に、分裂文を作るという選択肢を取れなかったのは、述語に対し必須の副詞成分として共起する引用句「…と」を後置することができなかつたためだろう。そこで採用されたのが、コト特殊構文と近い構造を持つ「ク語法…と+述語」だったのでないだろうか。

ただ、コト特殊構文と同様の用例として示した(38)(51)~(57)のク語法において、後続節の内容はク語法の動詞に対する必須成分の後置とは

ㄨ ある」としつつ、次のような用例を(疑似)分裂文の主語と推測している。これは黒田(1988: 33)の言う疑似分裂文に相当するものだろうか。

(i) 梅の花散らくはいづく [知良久波伊豆久] しかすがにこの城の山に雪は降りつつ(万葉・五・823)

解せない。この点には問題が残るようにも思える。また以上の試案は、従来の見方と大きく異なっており、不確実な点も多いだろう。有効な批判や代案が出ることを期したい。

8. ミ語法を承ける「と」に関する諸説

前節ではク語法に関する問題を扱ったが、ク語法と同様に上代語特有の語法としてしばしば問題になるのがミ語法であり、ミ語法もまた、引用助詞「と」との関連で重要な議論がある。すなわち、次のような「…みと」という形についてである。

- (63) …手枕まかず紐解かず丸寝をすればいぶせみと [移夫勢美等]
心なぐさになでしこをやどに蒔き生ほし…… (万葉・十八・4113)

8.1 一般的な理解と問題例

松浦 (2000: 21-24) に示されるように、こうした「…みと」の用例の「と」はしばしば引用の働きを持たないものと解釈されてきたようだが、岩井 (1970: 369-370) は「…からと」「…ゆえにと」の意で捉え「「と」はいちおう完結した意味を受けることとなる」としている。結論から言えば、その後の研究を見る限りでも岩井の解釈で大きな問題はない。しかし、以下で見るように子細に考察すべき問題点もある。

ミ語法が多くの場合に原因・理由表現を形成し、「…ので」「…から」と訳されることを考慮するに、「…みと」は素直に「…からと」に相当する形と見れば解釈上困ることはそれほどない。上例 (63) で言えば、「晴れ晴れしないからと、気晴らしに撫子の種を蒔いて育てて」のように訳せる。つまり藤田 (2000) で言う第Ⅱ類の引用構文の構造と解釈できるわけである。

鮫島 (1977: 248-253) は、もちろん第Ⅱ類という用語は使わないが、第Ⅱ類の構造の「…と」の中にミ語法が現れるという見方によっていくつか

の用例を解釈して見せている。引用句「…と」の内部において、ミ語法を受ける述語句が省略されているということもはっきり述べられている。

その後、竹内(2011)は「…みと」が「言ふ」と共起する第Ⅰ類の構造の用例、ミ語法に対する後続述語が省略された用例などを示しながら、「…みと」が引用句であり、後続する述語句との間で第Ⅱ類の構造を作り出していることを改めて詳しく論じている。

以上によって、「…みと」は第Ⅱ類の構造における引用句の形の一環だとすることに問題は無いように見受けられるが、この理解だけでは十分に説明できない点もある。次の用例を見たい。

(64) 思はぬに至らば妹が嬉しみと [歎三跡] 笑まむ眉引き思ほゆる
かも (万葉・十一・2546)

(65) …立ちて居て見れども異し峰高み谷を深みと [多尔乎布可美等]
落ち激つ清き河内に朝去らず霧立ち渡り… (万葉・十七・4003)

牧(1980: 87)は(64)の「嬉しみと笑まむ」を「嬉しいからと笑う」のように解するのは「どうもしっくりこない」と言う。全く意味の通らない解釈ではないが、笑うことの理由として「嬉しいから」のような言葉を心中に抱き、あるいは口頭で発しながら笑うという場面を描くのは、確かに少々奇妙ではある。山口(1993 b: 480)は(65)の「深みと」について「動作主の認識を示すとは到底思えない」とする。それを踏まえてか、後に葛(2006: 48)も同様に(65)の「深みと」を挙げて「〈主観的判断〉の意味は全然認めることができない」とする。後続する述語句「落ち激つ」の主体(滝)が非情物であるから、その発話や思考の内容を引用するなどということはありえないとの解釈かと思う。こうした疑問に端を発して、「…みと」の「と」が引用助詞の「と」なのかどうか疑ってみることは必要だろう。しかし、葛(2006)のように引用構文と全く異なる構造を想定するのは、十分な論拠を示すことができないように思う。以下では葛(2006)の主張内容について検討しながら、「…みと」についての適切な理解を探りたい。

8.2 薦 (2006) の問題点

薦 (2006) は、いくつかの根拠を示した後で「ミトの形のトは、文法上、引用のトとは性質を異にするものと言わざるを得ないであろう」(p.54) と判断する。ところがそのすぐ後で「引用のトは、ミ語法から〈主観的判断〉の意味が弱まったときに、その意味を補うものとして語尾的に付加され、ミトの形を作るのにもちいられたのではないか」(p.55) として、結局「…みと」の「と」が引用助詞であることを認めており、読む者としては一瞬、矛盾のようなものを感じることになる。おそらく薦の理解では、引用助詞「と」には少なくとも2種類の用法があり、通常の引用構文に用いられる引用句を構成するものと、ミ語法の持つ「主観的判断」なる意味合いが希薄化した場合にそこに接続するものが存在するということなのだろう。しかし、引用助詞「と」が後者のような用法を持つのだとすれば、ミ語法以外にも、本来「と」が無くても使える構造の中で「主観的判断」が弱まって「と」を付着させるようになる語・語句の例があって良いはずだが、薦はそのようなことは示していない。つまり今のところは、ミ語法に付く「と」だけのために作り出されたアドホックな仮説ということになるだろう⁽¹⁹⁾。

「主観的判断」が弱まったところに引用助詞「と」を付けられる、という法則の存在を認めることができるのかどうかは甚だ疑問である。そのような法則は無いとするならば、当然、ミ語法にそのような「と」が付くとは考えられないことになって、結局は、前項で見た竹内 (2011) のように第Ⅱ類引用構文のあり方の中に位置付ける方に落ち着くことになるはずである。

(19) 文法史関係の論文について紹介するブログ「ronbun yomu」(<https://hjl.hatenablog.com/entry/2019/12/02/070000#fn-59a10c2c>, 2022/8/25 閲覧)でも薦 (2006) が取り上げられ、「語尾的なト」が他にあるか?と考えるとそれは思い浮かばないので、第2類のト (藤田保幸) と考えて、なぜその性質しかないのかと考える方がよい議論になりそう」とされているが、筆者の以下の考察もほぼこれと同一方向のものである。

そして、以下に見るような蔦の着眼点も、これまで現代語研究の側で確認されている引用構文の在り方を踏まえれば、「引用のととは性質を異にする」というような考えを持ち出すこともなく説明可能だろうと筆者は考える。本項では蔦の所論を批判的に検討し、次項では「…みと」を第Ⅱ類引用構文の引用句と考えて支障がないことを論じる。

さて、蔦(2006: 49)は「…みと」の「と」を引用助詞の通常の用法と分析するのは難しいとして、そう考える理由を4つ挙げている。その1つは、従来言われているように「…み」と「…みと」とが同じような解釈になるという点であり、これを蔦は「交替的に現れると言ってよいほどよく似た用法を持つ」とするのだが、これによって「…みと」がミ語法と引用助詞「と」の組み合わせであるとは考えにくくなるというのなら、たとえば次のようなものにも同様のことが言えることになるのではないか。

- (66) a. 花子は、別れが悲しくて、何度も後ろを振り返った。
 b. 花子は、「別れが悲しくて」と、何度も後ろを振り返った。
- (67) a. 太郎は、腹が痛くて、病院へ行った。
 b. 太郎は、「腹が痛くて」と、病院へ行った。
- (68) a. 次郎は、先生の話がつまらなくて、教室から出ていった。
 b. 次郎は、「先生の話がつまらなくて」と、教室から出ていった。
- (69) a. キャサリンは、外が暗いので、天候を確認した。
 b. キャサリンは、「外が暗いので」と、天候を確認した。

これらにおいて、「と」があろうと無かろうと、表す事態は大きく変わるわけではない。情意形容詞や感覚形容詞のテ形、あるいは属性形容詞のノデ形は、原因や理由を示す点でミ語法に似ており、しかも、こうした「交替的」とも言えそうな2つの文を容易に作れる。しかし、だからといってこれらの「と」が引用助詞であるかどうかを疑う理由になるだろうか。第Ⅱ類の引用構文の構造を作る「と」が、たまたまそういった環境に現れているだけだと考えて問題無いのではないだろうか。

2つ目に挙がっている理由は、山口（1993 b: 480）でも言及されていた（65）の「谷を深みと落ち激つ」のような用例があるという点である。これは後続節主体が非情物である点において、確かに、単純に第Ⅱ類の引用構文と見るだけでは十分でないように思われる。しかし、蔦は山口（1993 b）が先立って指摘していたこの例しか示していない。この疑問例をあえて解釈するならば、次項 8.3 に示すように、「…みと」の文法化した結果と見る余地もあるし、滝を擬人化して「谷が深いゆえと、滝が激しく流れ落ちていく」のような意で詠んだ可能性を完全に排除できるとも言い切れない。また拙稿（2022 a）で論じた特殊な構造の引用構文と見るなら「見る者が「谷が深いから…」と思うような様子で、滝が激しく流れ落ちていく」という解釈も可能かもしれない。こうした曖昧な1例の存在は、「…みと」の「と」を引用構文の「と」と異質のものと見る論拠になりうるものとは思えない。

3つ目に挙がっている理由は、通常の引用句「…と」と異なり、「…みと」を「思ふ」「言ふ」等の引用動詞が承ける用例を見出しにくいという点であるが、これもやはり、早くに橋本（1962: 12）で指摘されていた事実であって、蔦自身が初めて気付いた点ではない。確かに、通常の引用句の現れ方とは異なるので一考が必要だが、次項 8.3 で示すように、第Ⅱ類との関係の中に落とし込んで説明することは十分可能と思われるので、引用構文を作る「と」と全く異質のものとするような考えを起す理由になるとは思えない。

4つ目に挙がっている理由は、引用助詞「と」の上接語は主として終止法の句となるから、ミ語法のような連用修飾語が来るのは異例だという点である。この4つ目に関しては蔦独自の調査結果が示されていて、上代語の引用句のあり方一般に関して新規性のある事実が知られる点は有意義である。しかしやはり、決定的に「…みと」が引用句でないことの証左となるわけではないだろう。

この4つ目の点についてもう詳しく見ていくと、蔦（2006: 51-54）は万

葉集において広く「と」の受ける語句を観察し、連用形を承ける「聞かまくほりと」(4209)「まさきくと」(157, 661, 3334, 3958, 4372)があること、また、「…までと」(4404など)のような連用修飾語を承ける形が40例ほど存在することを認めた上で、ミ語法で言いさしたような形を承ける「…みと」が34例もあるのは特異な現象であるとしている。また連用修飾語を承ける「と」は「今日のためと思ひて」(4151)のように引用動詞に続く用例があるので、「…みと」はその点でも別に考えるべきものだとする。用例分布の実態に関してはその通りのものと考えて良からうが、それを根拠として「…みと」を第Ⅱ類の引用句と全く異なる構造のものとするのが可能だろうか。薦自身の調査において、連用修飾語で言いさした形を承ける「と」が第Ⅱ類の構造で使用された事例はそれなりの量見つかるようであるし、「…みと」という形が、その中で使用頻度が高くなる事情を抱えているものと考えてみることに特段の支障は無いだろう。すなわち、第Ⅱ類の構造からの派生や転用、コロケーションの形成といった変化があった可能性は十分にあるように思う。このあたりについては次項8.3で詳しく述べる。

以上の通り、筆者は薦(2006)が示す4点のいずれも、「…みと」の「と」を引用構文の「と」と全く異なるものとする論拠になるとは考えない。そして、「…みと」の「と」を「ミ語法部分に担われていた〈主観的判断〉を明瞭に示す語尾的なもの」(p.55)などといった、他に例の無いようなよく分からないものとして無理やり位置付けようとする薦のそれ以降の論述にも、やはり賛同しかねる。

8.3 「…みと」を第Ⅱ類の引用句と見ること

まず重要な事実として押さえるべきは、薦自身が指摘しているように(p.53)、「…までと」などの「連用修飾語+と」の形が第Ⅱ類の引用句を作る用例は万葉集においても見出されるという点である。薦は引用助詞「と」はあくまで終止法の述語を完備した文のみを承けるのが原則だと見

ているようだが (p.51), 現代語の「と」で少し考えてみれば分かるように、誰かの発話や思考の内容の言葉を再現し引用できる助詞ならば、そこには言いさしなどの不完全な表現の引用にも当然用いられるはずであろう。したがって、係り先を言いさしたり省略したりしたミ語法を「と」が承けた「…みと」という形が現れるのは特に不自然ではない。そうした形が頻用されるのも、後続節の事態の理由を表す形として固定的になるような変化があったためだと想像してみるのがまず自然な発想ではないだろうか。実際、以下の通り類例の検証に基づいて十分ありうる推論だということが示せる。

第Ⅱ類の引用句「…と」の中で特殊な文法的性格を持つものの例として、藤田 (2000: 354-361) で示される「意図引用」について考えてみよう。

- (70) a. ?「あつ、近藤だ」と努力した。
 b. ?「あいつは公儀の犬だ」と努力した。
 c. ?「生かしておいては世のためになるまい」と努力した。
 d. 「斬り捨てよう」と努力した。

(藤田 2000: 357 の (18))

これらの4つの文における引用句の内容を一続きにしてみると、対象(近藤)に対する事態の認識に始まって (70 ab), その事態に対する判断 (70 c), そして行為の意志 (70 d) へと連続しており、いずれも「努力する」ことへと繋がる意図の一部と言えるが、その中で自然なのは (70 d) だけである (藤田は (70 c) も文脈次第では可としている)。ここからわかるように第Ⅱ類の構造においては、述語句が「努力した」等の具体性を欠いた内容しか描写していないならば、引用句の内容の方で具体的に何をしたいのかが明示されるような形になる。藤田は「引用句に引かれる心内の思惟が述部に示される行為をひき起こす引きがね・動機であるような意味関係において、引用句と述部とが結び付くようなタイプの引用構文」を広く「意図引用」と呼び、(70)に見える4つの意図引用における許容度の差から、引用句に「…しよう」等の意志内容が入るものを「直接的意図引用」とし

て、他と区別している。

そして藤田は、直接的意図引用と解される第Ⅱ類として「…(よ)うと」の用例を挙げて、(70)の「努力する」の他にも「一生懸命になる」「試みる」など、行動を一般化して述べたような述部を持つケースがあることを指摘している(pp.360-361)。

(71) 頭の中に、その黒森屋敷の像を結ぼうと一生懸命になっていました。(藤田2000: 361の(29))

(72) 生徒達から成るべく早くのがれようと試みつつ、(藤田2000: 361の(30))

ここから、「…(よ)うと」は他の意図引用の形とはやや異質のものに見えるべきことが知られよう(それゆえにか「…(よ)うと」を目的節の一種のように扱う向きもある)。

(73) 「大学院に行きたいな」と勉強を始めた。

(74)?「大学院に行きたいな」と試みた。

(75) 大学院に行こうと試みた。

これらはいずれも意図引用と解される形だが、(74)と(75)とで容認度に関があることは確かかと思う(表記上も(75)だけは鍵括弧をはずしたほうが自然に感じられる)。第Ⅱ類の構造における引用助詞「と」がその内部の文末形式と緊密に結び付いて、係り先の述語句のあり方にも一定の傾向を生じた事例と言えるだろう。次のような「…(よ)うとする」という形は、述語句の表す意味合いの具体性が更に減じて生じたものとも考えられ、有情物を主体とする必要も無い。

(76) 崖が崩れようとしている。

「…(よ)うと」は何らかの意図や目的を表すのに使える形であるから、日常会話においての使用頻度が高まるのも別段不思議なことではない。第Ⅱ類構造の中でも事例を多く観察できるのではないと思われる。

以上の意図引用の事例に照らしながら「…みと」について考えてみると、ミ語法で言いさした形が引用助詞と連なって第Ⅱ類の引用句となり、

主節の理由を表すような形で固定的になったものであるという推定も十分に成り立つのではないだろうか。用例が第Ⅱ類の構造のものに集中して現れるのも、それゆえのことと理解できる。本節冒頭で見た(64)の「妹が嬉しむと笑まむ」は、「…みと」が主節の理由を表す形式へ変化する中で、主体の情意・発言を示す働きが希薄化したことを示す例と見ることができよう。(65)の「谷を深みと落ち激つ」における「…みと」は、現代語の「…ようとする」のように、主節述語の有生性と無関係に主節主体の動きに伴う事情を示すものに変容した例と理解できよう。薦(2006)はミ語法が「主観的判断」なる意味合いを失いつつあったという考えを示し、その意味合いの補強のために「と」がどこからともなく現れてそこに付着するという現象を仮構しているが、そのように純然とした想像を膨らませるよりも、現代語の文法現象などで類似の事例を探し、それに関する研究から知見を得て考えるのが言語学における道筋だと筆者には思える。

もちろん、「…(よ)うと」は言いさしの形を引用するものではないし、また第Ⅰ類の引用構文でも「…(よ)うと+言った/思った」などの形で問題無く用いられる点では、「…みと」と異なっている。しかし、文法化あるいは複合辞化というべき現象は個々の語・語列ごとに起こるものなので、「…みと」を第Ⅱ類からの変容と見る際に、全く同様の変容を遂げた実例を指摘する必要はない。それでも「…みと」により近い類例を出すとするなら、次のように用いられる「…へと」があろう⁽²⁰⁾。

(20) 野田(2007)は次のような現代語の「…からと」について、後続節の事柄と同時に起こらなくて良いとし、第Ⅱ類の引用句と区別している。

(i) 吉村さん自身はたばこを吸わないが、壁のクロスが汚れるからと、客にも吸わせなかった。(野田2007: 47の(24))

筆者の解釈では、「客に吸わせない」という行動は恒常的であり、「壁のクロスが汚れるから」という理由も、常にその行動に伴っているように読める。こうした「…からと」は後続節の事柄が一回的でない点の特徴と見るべきではないだろうか。野田のように引用句と後続節は「同時でない」とするべきかどうか、いささか検討の余地があるように思うが、いずれにせよ後続節の理由を示すための形式として第Ⅱ類の引用句から一歩変化を遂げたものと見ることができだろう。このような「…からと」の詳細な分析は今後の課題だが、これ

(77) 三人は小舟で倭館へと渡った。(BCCWJ/上田秀人『波濤剣』)

これは、引用句内で格成分「…へ」の係り先述語が省略された形と取れ⁽²¹⁾、また第Ⅱ類の形で使用に著しく傾く点で「…みと」に類似した形式であると言える。この「…へと」は現代語では思考や発話を表す引用動詞へ連なる形よりも、(77)の「渡る」などといった移動を表す表現に係っていく言い方が馴染み深いだろう。

表2は、このような「…へと」がどのように形成されたのかを見るため国立国語研究所『日本語歴史コーパス』によって簡単な調査を行った結果である⁽²²⁾。このデータからは、古代からすでにこうした「…へと」が用いられ、中世以前は「…へと思ふ」など第Ⅰ類での使用も少なくなかったことが分かる。現代語では「東京へと思った／言った」などの表現はそれほど耳にしないように思うが、かつては「…へ」で言いさすような形を引用する表現も間々用いられたのであろう。

(78) またの日は、困じ暮らして、明くる日、幼き人、殿へと出で立つ。(蜻蛉・中・198)

(79) わが御方に臥したまひて、胸のやる方なきほど過ぐして、大殿へと思す。(源氏・紅葉賀・1-330)

(80) 木曾は長坂を経て、丹波路へ赴くと言う人も有り、又は北国へとも聞こえたれども、兼平が行方の覚束無さに、…(天草版平家物語・四・243)

ㄨ も「…みと」にかなり近いものではないかと思える。

(21) 杉本(2000: 18)は「引用の「と」の受け持つ「発話内容・思考内容」は確かに発話動詞、思考動詞が内在的にもつ必須補語的性格が強いが、逆にこれらは文の形式をもつことが主で、名詞的役割とはいいいがたい」として、「…へと」の「と」を引用助詞由来と見る考えを否定している。しかし、「へ」の受ける名詞だけでなく「へ」までを含めた形を「名詞的役割」と見ている点や、「文の形式」を持たない言葉は「と」が付かないと考えている点など、事実誤認が著しく、「…へと」を引用句に由来するものとする考えの否定としては成り立っていない。

(22) 中納言(2.6.1 データバージョン 2022.03)によって、語形「へ」(品詞大分類-助詞)と語形「ト」(品詞大分類-助詞)とが連なる形を検索した。

表2 「…へと+述語」の分類

	古代								中世前期					中世後期			近世			合計							
	万葉集	土佐日記	後撰和歌集	平中物語	蜻蛉日記	枕草子	源氏物語	和泉式部日記	堤中納言物語	後拾遺和歌集	小計	今昔物語集	千載和歌集	宇治拾遺物語	保元物語	平治物語	平家物語	とはずがたり	小計		天草版平家物語	天草版伊曾保物語	大蔵虎明本狂言集	小計	奥の細道	近松浄瑠璃	洒落本
第Ⅰ類		2	2	1	1	3				9	1	1	2	2	7	3	16	5	1	5	11			3	4	7	43
第Ⅱ類	1		1		1	1	1	2	8				1			2	3				0	2	20	8	30	41	
合計	1	2	1	2	2	4	1	1	2	17	1	1	2	1	2	7	5	19	5	1	5	11	2	23	12	37	84

近世に入ると、「…へと」は第Ⅱ類での使用に偏るようになっていく。「…へと」の文法化が進み、方向格を表す形として定着しつつあったものと想像される。

さて、近世以降の「…へと」の構造・用法は上代の「…みと」とよく似ている。となると、「…みと」も上代以前には第Ⅰ類でも一定程度使用されたかと推定することが許されるのではないかと。薦（2006: 56）は第Ⅰ類と解される「多みとなもきこしめす」（続日本紀宣命・五九詔）という用例の扱いに難渋しているようだが、上代以前にそうした言い方が問題無く用いられていた実態の名残りと推定するのが自然な発想ではないだろうか。

8.4 今後の課題

「…みと」に関しては結局どのような問題が残るのか。これに関しては以上で触れていない薦（2006: 56-60）の論述の中に、重要と思える部分がある。

すなわち、「…みと」は属性形容詞が使われる場合は必ず「…を…みと」のように助詞「を」が現れるとされる点である。どうして「を」が必須となるのかは不明であり⁽²³⁾、情意形容詞の場合と比較しながら考察する必

(23) これについて薦（2006: 58-60）は、「…を+名詞+と言ふ/見る」のように「を」を伴う構文は「…と言ふ/見る」に比べて「主観的判断」が明瞭だとし、情意形容詞と違って「主観的判断」の意味を持たない属性形容詞は「と」を

要があろう。また他に、情意形容詞は「…みと」でも「…み」でも「を」がやや現れにくいとされる点も興味深い。これも属性形容詞が入る「…みと」が必ず「を」を伴うということと関連があるかもしれない。

以上では、薦(2006)の主張のかなりの部分に対して否定的な見方を示したが、示されているデータ自体は興味深い点が少ないからずあり、また筆者の考えが最終的なものになるとも考えていない。考察を続けるべき課題は残されている。

ところで、「…みと」は第Ⅱ類の構造に特化しているならば、それはミ語法と引用助詞「と」という2つの要素のみからは予測できない現象であるから、複合辞化して特有の用法を備えたということになろう。こうした複合辞化に関する観点から問題になることは、次節で取り上げる。

9. 「と」を含む複合辞に関する諸説

古代語の引用助詞「と」に関して研究の遅れている課題として、「と」

-
- ㄨ 付加させるだけでは足りず、そうした「主観的判断」の働きを持つ「を」を必要とした、というような趣旨のことを述べている。しかし、「…を+名詞+と言ふ/見る」は単に述語の動作の対象物がヲ格で現れているだけであろう。「…を+名詞+と言ふ」という文型でも、ヲ格名詞に対する呼び名が使われる意を表すならば「主観的判断」のような意味合いは読み取れないし、あるいは無情物を主体とする「…を+名詞+とす」のような文型でも、当然「主観的判断」があるということにはならない。

(i) 古語に、番繩の類、之を綱根と謂ふ。(延喜式祝詞・大殿祭)

(ii) 限りあれば薄墨衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける(源氏・葵・2-49)

「主観的判断」なる意味合いを認めるにしても、それは述語動詞が判断などの思惟を伴った行動を表す用法で使われた場合における、述語動詞の意味の一面にすぎないのであって、共起する助詞「を」の意味と考えるのは不当だろう。「主観的判断」を「を」自体の意味特徴とするような考えは他の他動詞文の説明の際にいくらでも支障を来すし、もしそのような意味特徴を認め得たとしても、その「を」は「言ふ」「見る」等の他動詞に対する格の標示でもあるわけだから、そのような他動詞の存在しない環境においてミ語法の前接語に付くようになるという過程もおよそあり得るものとは考えられない。

を含む複合辞のことがある。一般に、複合辞の発達は近現代語における特徴と見做されているようであるが、古代語においても種々の複合辞があり、「と」を含む形をしたものもかなりの数あるようだが、その外延は定かでない。広く古代の複合辞を取り扱った研究が必要と感じられるが、ここでは「と」を含むものについての研究に絞って、これから必要となる観点を示したい。

9.1 複合辞の種類

昨今、古代語研究に関心の高い者であれば、文法事項で疑問が生じた際にはまず小田（2015）を参照するのが最初の作業になっているのではないかと思う。小田（2015）は古典文法の諸事項を最も網羅的に集めた参照文法書であり、実際、「と」を含む形の複合辞も複数挙げて、その用例と簡単な解釈を付している。具体的には、「といはば」「といはむからに」「といひ」「といふ」「といふも」「といへど（も）」「ととして」⁽²⁴⁾「となし」「となれば」「とにはあれねど」「とはいひながら」「ともいはず」（以上 pp.519-520）「とて」「とは」「てふ」「とふ」「ちふ」「など」⁽²⁵⁾「などて」（以上 pp.529-533）が挙がっており、さらに小田（2022）は「といはず」「といひて」「といふとも」「といふは」「といへば」「としらず」「となしに」「とはなしに」「ともいはず」「ともいはず」「ともなく」「ともなしに」を追加し

⁽²⁴⁾ 「ととして」の「と」は繫辞の「と」に由来するものかと思われるが、鈴木（1997: 402）が示すように「ととして」は上代は引用助詞的に用いられたようである。また訓点資料においても「…むとして」という形がしばしば見られる。

⁽²⁵⁾ 小田（2015: 532）に「など」の中に「と」を含んでいるので、本来「などと」という言い方はなかったとあるように、一般には引用助詞「など」の語源は不定語「なに」と引用助詞「と」の複合と見做されているようだが、「引用語句+なに+と」という形の実例は見出しがたい。副助詞「など」の場合、「酒なにと持て追ひ来て」（土佐日記）に見えるような「なにと」が縮約したものと考えられているが、この「と」は並列助詞であろう。引用助詞「など」は、引用助詞「と」とは無関係に、副助詞「など」が転じて生じたものと考えるのが妥当ではないだろうか。現代語で例示の働きを持つ「やら」「だの」は引用助詞的な用法にも転用されるが、これらと同様の転用によって生じた可能性がまず探られるべきと思う。

ている。引用助詞と異なる「と」に由来するものも含まれるようだが、まずはこれを見て「と」と他の要素による複合辞化のあり様を考えることになるのだろう。

9.2 研究例の少なさ

現代語に関しては、藤田 (2019: 38-52) のように引用助詞「と」を含む形の複合辞を総合的に捉えた考察も既に行われているが、古代語の場合はそうした全体的な視座に立つ前に、まずは一つひとつの複合辞について、可能な限り用法記述の精度を上げなければならない。現状はまだそうした段階にある。というのも、小田 (2015) の示した上述の複合辞の中でも、「とて」「といふ」「といへども」「となし」に関してはいくつかの研究例があるものの⁽²⁶⁾、それ以外は殆ど手つかずの状態にあると見てよいからである。

また、複合辞として認定すべきものは他にも見つかる可能性もある。たとえば拙稿 (2021 a) では「と見る」が複合辞化している可能性に触れたが、こうした「と」と自立語がたまたま共起しているだけのように見える形にも複合辞化の可能性が隠れている⁽²⁷⁾。文末の「とぞ」「となむ」「とや」「とこそ」「とか」も、それぞれ引用できる言葉の種別 (発言・思考・手紙文・和歌) に一定の偏りを持つことから考えるに⁽²⁸⁾、終助詞的な複合

(26) 「とて」は拙稿 (2016 c, 2017 a, 2017 b, 2017 c) で取り上げ、「と言ひて」「と思ひて」との違いを詳細に示した。「といふ」の連体助詞的な用法に関しては拙稿 (2020) で分析し、7つの用法の存在を指摘した。「といへども」は田中 (1992) によって取り上げられ、体言に付きうる点で「といふとも」と異なることなどが指摘されている (pp.45-46)。「となし」は拙稿 (2018 a) で扱い、「…と思われそうな様子ではない」の意で取るべきことを論じた。

(27) 山口 (1983) は狭衣物語において「と見ゆ」が主体をはっきりさせない表現として用いられることに注目しているが、これも「と見ゆ」が助動詞相当の複合辞に変容している可能性を示唆するものだろう。中村 (2017) は「と思ふ」「と見る」「と聞く」「と知る」などに関する古典作品の注釈の状況を示しているが、これらの「と+述語」にも複合辞化の可能性が示唆されているように思う。

(28) これらの形式の用法については拙稿 (2022 b) で詳細を記述した。

辞と見るべきであろう。あるいは、大木（1982）によれば、説話や歴史物語において登場人物の発言の引用に「とぞ」が用いられると、それ以降間もなく章段が閉じられるケースが多いという。これも興味深い指摘であり、「ぞ」の働きのみでこれを説明できないならば、「とぞ」を複合辞と見ることになる。「となむ」「とや」「とこそ」などについても、その用法は「と」と係助詞の働き方を考慮するだけで説明がつくのか、考えてみる必要があるだろう。

9.3 漢文訓読語の複合辞

漢文訓読語に見られる複合辞の研究も重要である。大坪（1959）は、訓点資料に見える「といは」「といし」「いし」「とは」の用例について検討し、「といは」「といし」「いし」は引用語句を承けると同時に主語や連用修飾語の係り先にもなりうる述語相当のものであり、「とは」は引用語句を承げるだけのものであることを指摘している。「とは」は和文資料でも見出されるものだが、「といは」「といし」「いし」は訓点資料からしか用例を拾うことのできない複合辞で、おそらく「い」の部分は動詞「言ふ」から来るものである⁽²⁹⁾。稲垣（1961: 88）は「といは」と「といふは」が両方用いられる訓点資料の存在に触れて、「もし、「といは」が「といふは」の促音化したものであれば、それを示すのにヨコト点をわざわざ多種にわけて適用する必要がどこにあるであろうか」とするが、この疑問を解決するには「といは」と「といふは」の間に何らかの意味の差があった可能性を探る必要があるだろう。なお、筆者の見る限り「といし」の訓点は百法顕幽抄のみにおいて「言」「云」の読み方として機械的に打たれていたようであり、「といは」等との比較は難しい。

⁽²⁹⁾ 稲垣（1961）は「といは」「といし」「いし」の「い」が格助詞の「い」に由来するものと考えているが、連用修飾語や主語を承けられる点からすれば「言ふ」を出自と見る方が妥当であろう。

9.4 「と+述語」型複合辞の発見方法

内省の効かない古代語において、複数の単語が結び付いて複合辞になっていることを確認する手段は限られてくる。ただ、「と+述語」という形に関しては、複合辞化していることを見出す明示的な方法があるかもしれない。森重（1950: 19-20）は、従属節内で主格を標示する「が」が「…といふ」の内部の主語についている次のような用例に注目している。

- (81) 音に聞き目にはいまだ見ず左用姫が〔佐容比売我〕領巾振りき
とふ〔必礼布理伎等敷〕君松浦山（万葉・五・883）

引用助詞「と」の前が文末相当になっているのならば、「が」で標示された「左用姫」に対する述語句は連体形で結んで「振りし」のようになるはずである。しかし終止形の「き」が現れているので、「と」の直前は文末相当とは考えられず、「…とふ」（連体形）までを述語と見ることになる。このことから、森重は「…と」と「いふ」との間において「結びつきが極めて密接」になっているとするが、それはつまりこの「とふ」は助動詞相当の複合辞として前接語に付いているということであろう。その後、佐佐木（1996: 54）も同様の現象を根拠として「といふ」に接尾辞的、あるいは助動詞的な要素とすべきものがあることを示している。森重は「と聞く」「と思ふ」でも同様の例があることを示しているので、これらも助動詞相当の可能性を考えるべきだろうし、他にもこの着眼点によって「と+述語」型の複合辞が見出されるかもしれない。

ただ、この着眼点がどの程度有効なのかについては怪しい点も無いではない。小田（2015: 443）は「引用句中の係助詞に対して引用外部の述語が曲調終止する句型」として、次のような例を挙げている。

- (82) 大臣にならむ贖勞を取らんなどぞ、あまりおどろおどろしきことと耳とまりける。（源氏・東屋・6-31）
- (83) 男君ならましかばかうしも御心にかけてたまふまじきを、たじけなういとほしう、わが御宿世もこの御事につけてぞかたほなりけり、と思さるる。（源氏・滯標・2-294）

係助詞「ぞ」の付いた語句は引用句「…と」の内部にあり、結びは「と」の後にある文末（下線部）で起きているように見える。(83)の方は森重(1950)・佐佐木(1996)の考え方に基づいて「とと思す」が複合辞化しているとすれば良いかもしれないが、(82)の「と耳とまる」を複合辞と見るのは無理があるように思える。「…などぞ」が引用句の外にあるという解釈を取れば問題は回避されるが、小田(2015: 444, 534)の挙げる用例を見る限り⁽³⁰⁾、中世語においては「曲調終止」を考慮しなければならない場合があるようである。この点には注意すべきだろう。

10. 引用句内部の特徴に関する諸説

前節までで古代語の引用助詞に関係する主な課題は浚ったつもりであるが、最後に、引用句内部に現れにくい要素があるとされる点に触れておくことにしたい。

10.1 断定の助動詞「なり」が現れにくい（ように見える）こと

現代語の引用助詞「と」は、どこかで発せられた言葉を再現しようとする場合には特に制限なく用いられる。つまり、どのような言葉にでも後接できると言ってよい。古代語の「と」も同様だったろうと推定できるのだ

(30) 此島(1979: 22)もこのような係助詞の用例を3例挙げているが、いずれも「といふ」「と聞く」「と思ふ」の複合辞化と見れば一応説明が付く。此島はこれを「誤用」としつつ、「単純な誤用ではなくて、引用と地の融合から来るころの、心理的にはかなり自然な誤用であろう」と述べているが、これはつまり引用句内のある部分から地の文と同質になっていて、「と+述語」の部分に繋がっていくという見方である。これが事実なら、係助詞の生起位置から「と+述語」にかけての部分地文の秩序になっていると予想される。

また伊牟田(1997: 29-31)も同様の用例を多く挙げているが、やはり「と聞く」「と見る」「とはべり」などが複合辞化したものとして説明できそうである。伊牟田は「と」が承けている語句は、係助詞と直接呼応するのではなく、後に続く語句と一まとまりになって結ぶ（係助詞はその文末と呼応している）、ということになる」と述べているが、これも、「と+述語」が助動詞相当の複合辞となっているという見方とほぼ同じ考えであろう。

が、小田 (2015: 528-529) に「引用「と」の直前には判断辞「なり」(および形容動詞の語尾)が表示されないことが多い」という記述がある。

(84) あさりする漁夫の子どもと人は言へど見るに知らえぬうまひと
の子と (万葉・五・853)

こうした用例に対する従来の解釈は、やはり「なり」を補って捉えるというものである (大塚 1934: 52, 吉井 2020: 648 など)。これはおそらく、現代語の感覚で「名詞＋と言う／思う」のような形よりも「名詞＋だと言う／思う」の方が自然であるためかと思われる。

しかし、「名詞＋なりと」という形が古代において用いられないわけではない。国立国語研究所『日本語歴史コーパス』を用い、源氏物語において「名詞＋なり」を鍵括弧で承けて「と」に繋げる形を検索したところ、次のような用例が 27 例得られた。

(85) …大殿, 「あやしや。物の師をこそまづはものめかしたまはめ。
愁はしきことなり」とのたまふに, (源氏・若葉下・4-202)

このことから、「名詞＋なり」を「と」で承けて引用語句として示すことは十分あり得たと考えるべきだが、その用例数は確かに少ないかもしれない。ここで、次のような「…を＋名詞＋と思ふ」という形の認識動詞構文について考えたい。

(86) ここの宿守にて住みける者, 時方を主と思ひてかしづき歩けば,
… (源氏・浮舟・6-153)

拙稿 (2016 b) で明らかにしたように、この構文の「名詞＋と思ふ」は古代語において「なり」を伴って「名詞＋なりと思ふ」のようになることがほぼ無い。また、「…を」と「…と」の語順を入れ替えることができないことなどから、「…を…とす」などの変化動詞文と同様の構造を持っている、「と」は引用助詞ではなく繋辞の「と」だと考えられる。おそらく「…を…と言ふ」なども同様であろう。現代語においては「だ」がある方が自然と判断する話者が多いようだが、それは中世以降に生じた傾向であり、おそらく「…と」の部分に形容詞終止形を入れるタイプの認識動詞構

文からの類推によって述語文の形を整える方向へ変化したものと推定される。

これを踏まえて(84)のように「なり」を補いたくなるような「名詞＋と」の用例を見ると、「…を…と言ふ」における「…を」が省略された文として了解できるだろう。「なり」が用いられない「名詞＋と」の用例は、こうした「(…を) …と＋発話動詞／思考動詞」という変化動詞文的な構造で理解できる場合が多いのではないだろうか。こうした予測のもとで調査を行うことが必要であるように思う。

10.2 山口(2000)の調査から見えてくるもの

次いで、山口(2000: 81)の示す興味深いデータにもここで触れておく。山口は蜻蛉日記における「と」「とて」「など」がどのような言葉の引用に用いられるかを調査して、心中言の引用は「と」:「など」:「とて」=334例:20例:13例となっていて「と」に大きく偏るのに対し、山口の言う「直接会話」では「と」:「など」:「とて」=172例:90例:67例となっていて「など」「とて」の用例がかなりの量に達することを示している。ここでは山口の調査結果の全てには触れないが、「と」はどのような言葉の引用にも問題無く用いられることが分かる一方で、「とて」「など」等の複合辞は何らかの制約をそれぞれ伴っていることが知られるわけである。引用助詞として使われる複合辞が引用語句に何らかの特徴を示すとなると、前節で見た種々の複合辞も同様の観点から調査を行い、引用語句の特徴を探っていく必要があるだろう。

11. ま と め

本稿では、古代語の引用助詞「と」に関する従来の研究を広く見渡して、私見を加えつつ今後の課題を探り出した。要点を列挙すれば次の通りである。

- ・(2節) 語源説に関しては、副詞「と」に由来するという通説よりも、何らかの発話動詞の縮約と見る方が有力と思われるが、繫辞の「と」に由来するものもあるかもしれない。異なる出自の語が偶然「と」という語形で現れている可能性もある。
- ・(3節) 引用構文の第Ⅰ類は、述語となる動詞語彙が現代語とかなり異なるようなので、その調査を継続する必要がある。第Ⅱ類は、「とて」「と言ひて」などの類義表現との相違点を記述することが今後の課題である。第Ⅱ類と類似した形を取る「…を…と」構文は、事物の属性を表す「名詞+と(繫辞)」がヲ格の主語を伴って現れた形の残存ではないだろうか。
- ・(4節) 語法に関しては古代語特有の問題は発見されていない。引用句内に生じる「しかじか」などのプレースホルダーの種類や語法における位置付けなどが問題となろうか。
- ・(5節) 動詞終止形を承ける「と」が作る並列表現の意味構造は詳しく分析されているが、引用助詞「と」と明確に区別する方法は今後も検討が必要と思われる。
- ・(6節) 引用助詞の「と」を、動詞終止形を承ける「と」や繫辞の「と」などと結び付けて、派生関係を想定しようとする考え(川端1958など)は、合理性を欠く部分が多い。
- ・(7節) 「いはく…といふ」のようにク語法で引用句「…と」を導く形が、本来「といふ」等の結びを伴うものだったことを示すためには、平安時代初期における訓点資料での細かな用例調査が必要である。上代には「連用修飾語+述語句」から連用修飾語を後置して述語文の形に整え、残った述語句をク語法でまとめる語法が存在したようだが、その一環として「ク語法…と+述語」の構造が生じたのではないだろうか。
- ・(8節) ミ語法を引用助詞「と」で承ける「…みと」は、第Ⅱ類の引用構文の引用句が変容したものと捉えて問題無いが、蔦(2006)の示すよ

うに、属性形容詞を用いる場合に必ずヲ格成分を伴って「…を…みと」となることや、情意形容詞を用いる場合にヲ格成分がやや現れにくいことなどは、その要因の説明が今後求められる。

- ・(9節) 引用助詞「と」を含む複合辞は小田(2015, 2022)等によってさまざまなものが挙げられているが、その大部分の分析は手つかずとなっている。また、それ以外にも複合辞を見出していく必要がある。
- ・(10節) 断定の助動詞「なり」が引用語句末尾で表示されていないように見える用例の多くは、名詞接続の繫辞「と」が使われる「…を+名詞+と思ふ／言ふ」等の構文においてヲ格名詞が省略されたものではないだろうか。引用句内部の要素の現れ方は、「とて」「など」等の複合辞の場合に特徴が見られるようなので、その調査が必要である。

6節以外では、いずれも問題提起の形を取るようになった。今後の研究の進展が俟たれるところである。

12. おわりに

現代共通語の引用表現に関しては、藤田(2000, 2014)をはじめとした先行研究の蓄積が大きい。そのためか、藤田(2014)に対する書評として出た野田(2016)には次のような考えが示されている。

「文法論としての引用研究」は、藤田(2000)や本書で十分な成果が得られている。藤田はまだ研究すべきことがたくさん残っていると考えているようであるが、これから若い研究者が新しく参入して新規性が認められる研究をするのが難しい状況になっている。

(野田 2016: 93)

思うに、野田のように著名な研究者が『日本語文法』などの学会誌でこうしたことを書くと、「若い研究者」はそれを信じて引用表現に関する研究を敬遠してしまうのではないだろうか。「文法論としての引用研究」の対

象は現代共通語に限られるわけではなく、引用助詞を伴う表現のみが対象となるわけでもないだろう。奥村（1997, 2001）が注目するような、「……て思ふ」等の、引用助詞とは別の手段によって思考や発話の内容を示す表現との比較も重要である。野田自身も引用表現に関してこれから課題となることをいくつか示しているように（pp.93-95）、藤田（2000, 2014）を読んだ者がそれぞれの視点を持つことによって、新たな研究課題が芽吹いていくことを期待すべきであろう。本稿で扱った古代語の引用助詞も、これから研究の俎上に載せられるべき対象の一例に過ぎないものであり、「文法論としての引用研究」がどの程度の広がりを持ちうるのか、筆者には予測も付かない。藤田（2014: 414）が「引用研究が更にどのような形で展開可能か、まだ十分に考えられてもいないし、そもそも引用研究自体についてその先が見通せるほどよく理解されてもいないと思えるのである」と述べているのも、そういうことだろう。それでもなお⁽³¹⁾、「新規性が認められる研究をするのが難しい」と言うべきであろうか。

以上、本稿では多くの先学に対し批判的なことを述べてきた。特に、川端（1958）と葛（2006）は日本語学において著名な査読誌（『万葉』『国語国文』）に掲載された論文であるだけに——川端論文や葛論文に対し実際に査読が行われたかどうかは知らないが——、良かれ悪しかれ今後の引用助詞研究に影響をもたらす可能性が高いものと考え、その内容の当否を詳細かつ批判的に検討した。その結果、残念ながらそれぞれの主張の大部分を否定するようなことにもなった。が、それらはあくまで科学の健全かつ活発な進展を期して、そのために議論を呼び起こすことが必要だと考えてのことであり、論者個人の人格を云々しようとするものでないのは勿論である。

(31) 野田は、野田（2005: 19）においても「新しい展開が難しいもの」として「[～と]で表される引用の研究」を挙げていた。これを受けて藤田（2014: 414）は「同じ難しい」とし、その理由も述べているのだが、それを踏まえてなお野田は同趣旨の発言を野田（2016）において行ったわけだから、引用表現研究の新たな展開が困難であるという考えは相応に根強いのだろうと思う。

問題のある説を唱え、あるいは支持する論者が決して少なくなければ、それらがいわば野放しになって、あちらこちらで無批判に引用され、誤りの連鎖を生んでいる可能性もある。適切な見解がその中で埋もれて、せいぜい“数ある説の一つ”という扱いしか受けられなくなっているようなこともありえる。こういう状況を変えていかなければならないことは、研究に従事している者ならば誰もが認めるところだろう。今後の研究を活性化するための整備として、可能な限り多くの先学を一通り並べて一つひとつに言及し、意義のある説とそうでない説とに選り分ける作業を行うことは避けられない。本稿では、拙いながらそれを実践すべく筆を執った次第である。

依拠テキスト（用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を〔 〕に示した。）

延喜式祝詞……築島裕（1995）『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』古典研究会／続日本紀宣命……北川和秀（1982）『続日本紀宣命－校本・総索引』吉川弘文館／万葉集・竹取物語・伊勢物語・平中物語・土佐日記・落窪物語・蜻蛉日記・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・堤中納言物語・古今和歌集……新編日本古典文学全集／宇津保物語……室城秀之（1995）『うつほ物語 全 改訂版』おうふう／古事記歌謡・日本書紀歌謡・日本霊異記夜の寝覚・浜松中納言物語・栄花物語……日本古典文学大系／四分律……大坪併治（2001）『石山寺本四分律古点の国語学的研究』風間書房／成実論（巻十一～十六、十八、二十一～二十三）……稲垣瑞穂（1954 a）「東大寺図書館蔵本成実論天長点上」『訓点語と訓点資料』2、同（1954 b）「東大寺図書館蔵本成実論天長点下」『訓点語と訓点資料』3、鈴木一男（1954）「聖語蔵御本成実論卷十三天長五年点訳文稿」『奈良学芸大学紀要』4-1、同（1955）「聖語蔵御本成実論卷十八天長五年点について」『奈良学芸大学紀要』5-1、同（1956 a）「聖語蔵御本成実論卷十一天長五年点訳文稿」『書陵部紀要』6、同（1956 b）「聖語蔵御本成実論卷十六天長五年点」『奈良学芸大学紀要』5-3、同（1957 a）「成実論卷二十二天長五年点」『書陵部紀要』8、同（1957 b）「東大寺図書館蔵成実論卷十五天長点」『南都仏教』3、同（1957 c）「東大寺図書館蔵成実論卷二十一天長五年点」『訓点語と訓点資料』8、同（1962）「聖語蔵御本成実論卷十四天長五年点」『奈良学芸大学紀要』10-2、同（1966）「成実論卷二十三天長五年点訳文稿」『南都仏

教』18／金光明最勝王経……春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』勉誠社／大智度論……大坪併治（2005）『石山寺本大智度論古点の国語学的研究 上』風間書房／地蔵十輪経……中田祝夫（1954）『古点本の国語学的研究 総論篇 訳文篇』勉誠社（1989年の改訂版に拠った）／大慈恩寺三蔵法師伝（興福寺本）…築島裕（1965-67）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』東京大学出版会

※用例検索には次のデータベースを利用した。

- ・国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』<https://base3.nijl.ac.jp/>
- ・国立国語研究所『日本語歴史コーパス（CHJ）』バージョン 2022.3
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search>
- ・国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』データバージョン 2021.03 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>
- ・国立国語研究所『日本語諸方言コーパス（COJADS）』バージョン 2022.3
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/cojads/search>

参考文献（本稿で言及したもののみ）

- 浅野信（1959）「『と』の研究」『国文学 解釈と教材の研究』4-9 pp.46-49
- 麻生耕三（1958）「時枝文法「と」の本質」『愛媛国文研究』7 pp.83-88
- 井上和子（1983）『変形文法と日本語・上』（第七版）大修館書店
- 伊牟田経久（1997）「係り結びについての一考察－誤用とされる例をめぐって－」『国語国文薩摩路』41 pp.25-33（鹿児島大学法文学部国文学研究室）
- 稲垣瑞穂（1961）「訓点資料に残された古代の助詞「い」」『訓点語と訓点資料』15 pp.61-92
- 稲垣瑞穂（1966）「漢文訓読語脈の会話引用形式－「く」語法について－」『明石工業高等専門学校研究紀要』2 pp.1-15
- 岩井良雄（1970）『日本語法史 奈良・平安時代編』笠間書院
- 岩井良雄（1976）『源氏物語語法考』笠間書院
- 岩下裕一（2003）『「意味」の国語学』おうふう
- 内尾久美（1982）「助詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別 日本文法講座9 助詞』（再版）明治書院 pp.69-106
- 宇都宮睦男（1982）「引用のク語法について」『解釈』28-8 pp.43-46
- 遠藤嘉基（1936）「竹取物語の文章と語法」序説－特に対話の文について－『国語国文』6-5 pp.38-60
- 遠藤好英（1963）「三宝絵における会話の引用形態」『文芸研究』45 pp.7-19（日本文芸研究会）

- 大塚悦三 (1934) 『助詞と助動詞の研究』 大倉広文堂
- 大坪併治 (1959) 「トイフハ・トイハ・トハについて」 『国語国文』 28-2 pp.40-59
- 大坪併治 (1981) 『平安時代における訓点語の文法 下』 風間書房
- 奥村悦三 (1997) 「文の成り立つところ」 『叙説』 25 pp.17-32 (奈良女子大学国語国文学会)
- 奥村悦三 (2001) 「文を綴る, 文を作る」 『叙説』 29 pp.10-27 (奈良女子大学国語国文学会)
- 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』 和泉書院
- 小田勝 (2022) 「『実例詳解古典文法総覧』 補遺稿 連載第 109 回 第 15.1 節～第 15.3 節」 (<https://www.izumipb.co.jp/files/kotenbunpouhoikou/hoikou%20109.pdf>, 2022 年 8 月 26 日参照)
- 亀井孝 (2017) 『概説文語文法 改訂版』 筑摩書房 (初版 1955 吉川弘文館, 改訂版 1957 吉川弘文館)
- 川端善明 (1958) 「引用－上代語の場合－」 『万葉』 28 pp.1-30
- 金田一京助 (1941) 『新国文法』 武蔵野書院
- 金田一春彦 (1964) 『四座講式の研究』 三省堂
- 熊丸令 (2005) 「日本語の不定語・重ね不定語の特性と複文の分析」 卒業論文, 九州大学 (<http://www.gges.org/library/class1/docuclass1/soturon/Kumamaru2005.pdf>, 2021 年 4 月 30 日参照)
- 黒木邦彦・藤本真理子・清田朗裕・森勇太 (2008 a) 「中古王朝物語の会話文－地の文との境界をめぐる－」 『詞林』 43 pp.1-7 (大阪大学古代中世文学研究会)
- 黒木邦彦・藤本真理子・清田朗裕・森勇太 (2008 b) 「中古和文における会話文と地の文の境界」 『語文』 91 pp.60-68 (大阪大学国語国文学会)
- 黒田成幸 (1998) 「主部内在関係節」 平野日出征・中村捷編 『言語の内在と外在』 東北大学文学部 pp.1-79
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究』 桜楓社
- 此島正年 (1978) 『日本文法史概説』 桜楓社
- 此島正年 (1979) 「引用－文構成上の機能－」 『湘南文学』 13 (東海大学日本文学会)
- 小林好日 (1970) 『日本文法史』 刀江書院
- 小西いずみ (2013) 「西日本方言における「と言う」「と思う」テ形の引用標識化」 藤田保幸編 『形式語研究論集』 和泉書院 pp.301-317
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』 ひつじ書房
- 佐伯梅友 (1966) 『上代国語法研究』 大東文化大学東洋研究所
- 佐佐木隆 (1996) 『上代語の構文と表記』 ひつじ書房

- 佐佐木隆 (1999) 『万葉集と上代語』 ひつじ書房
- 佐佐木隆 (2007) 『『万葉集』の歌と統紀宣命の表現－連体形準体句・ク語法－』
『学習院大学国語国文学会誌』 50 pp.3-17
- 佐藤喜代治 (1962) 『日本文法要説 古語篇 上巻』 日本書院
- 鮫島正英 (1977) 「讃酒歌の性格を考える－二三の語法を通して－」 『論集上代文学』 8 pp.241-259 (万葉七曜会)
- 滋野雅民 (2011) 「会話の引用形式における四つの型の位相上・用法上の差異」
『説話』 11 pp.3-16 (説話研究会)
- 杉本和之 (2000) 「「～へと+動詞」という表現をめぐる」 『愛媛大学教育学部
紀要 第2部 人文・社会科学』 32-2 pp.9-18
- 鈴木一男 (1959) 「初期点本所見の呼格表示の助詞「と」について」 『訓点語と訓
点資料』 12 pp.41-52
- 鈴木一雄 (1971) 「源氏物語の会話文」 山岸徳平・岡一男監修 『源氏物語講座
第七巻 表現・文体・語法』 有精堂出版 pp.69-101
- 鈴木一彦 (1997) 『日本文法の本質－語・句論－』 東宛社
- 砂川有里子 (2007) 「分裂文の文法と機能」 『日本語文法』 7-2 pp.20-36
- 武市真弘 (1987) 「格助詞「と」の一二の用例について－祝詞の構文をめぐる
て－」 『山口女子大國文』 8 pp.1-11
- 竹内史郎 (2005) 「上代語における助詞トによる構文の諸相」 『国語語彙史の研
究』 24 pp.167-184
- 竹内史郎 (2008) 「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」 『国語と国文学』
85-4 pp.50-63
- 竹内史郎 (2011) 「ト節にミ語法を含む構文－助詞トによる構文補記－」 『万葉語
文研究 6』 和泉書院 pp.89-107
- 田中雅和 (1992) 「条件句構成の「雖」・「トイヘドモ」・「トイフトモ」について」
『鎌倉時代語研究』 15 pp.32-77
- 玉地瑞穂 (2021) 「連体形から終止法の出現－日本語の古語「と言ひたる」の
例－」 『神戸親和女子大学研究論叢』 54 pp.67-71
- 築島裕 (1954) 「中古漢文訓読文の文構造」 『国語と国文学』 31-9 pp.42-54
- 築島裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 東京大学出版会
- 辻本桜介 (2014) 「現代語のトと中古語のトテに関する引用述語の省略という分
析について」 『日本語学論集』 10 pp.36-69 (東京大学大学院人文社会系研究
科国語研究室)
- 辻本桜介 (2015) 「引用句の連接について」 『日本語学論集』 11 pp.41-69 (東京
大学大学院人文社会系研究科国語研究室)
- 辻本桜介 (2016 a) 「古代語における引用表現「～と見る」について－現代語と

- 比較して-」『国語と国文学』93-1 pp.55-68
- 辻本桜介 (2016 b) 「中古語における認識動詞構文の諸相－現代語と比較して－」『日本語学論集』12 pp.108-157 (東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室)
- 辻本桜介 (2016 c) 「主節主体の動きを表す動詞終止形に接続するトテについて－引用と異なる機能の分析－」『日本語の研究』12-2 pp 35-51
- 辻本桜介 (2017 a) 「中古語のトテについて (一)」『米子工業高等専門学校研究報告』52 pp.9-25
- 辻本桜介 (2017 b) 「中古語のトテについて (二)」『米子工業高等専門学校研究報告』52 pp.26-43
- 辻本桜介 (2017 c) 「中古語のトテについて (三)」『米子工業高等専門学校研究報告』52 pp.44-58
- 辻本桜介 (2017 d) 「文相当句を受けるトナリについて－中古語を中心として－」『ことばとくらし』29 pp.3-19 (新潟県ことばの会)
- 辻本桜介 (2018 a) 「中古語の「～となし (無し)」について－体言・動詞終止形を受ける場合を中心として－」『米子工業高等専門学校研究報告』53 pp.10-27
- 辻本桜介 (2018 b) 「中古語におけるナドの引用助詞用法について」『国語と国文学』95-7 pp.53-68
- 辻本桜介 (2019) 「中古語の文法研究における訓点資料の活用」『米子工業高等専門学校研究報告』54 pp.40-68
- 辻本桜介 (2020) 「中古語における連体助詞的な複合辞「といふ」の諸用法」青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究 5』ひつじ書房 pp.123-147
- 辻本桜介 (2021 a) 「中古語における視覚動詞「見る」の補文」『日本文芸研究』72-2 pp.1-29 (関西学院大学日本文学会)
- 辻本桜介 (2021 b) 「中古語における引用表現「…とあり」について」『日本文芸研究』73-1 pp.1-22 (関西学院大学日本文学会)
- 辻本桜介 (2022 a) 「中古語における引用句「…と」の特殊用法」中部日本・日本語学研究会編『中部日本・日本語学研究論集』和泉書院 pp.3-22
- 辻本桜介 (2022 b) 「中古語における引用句の文末用法－終助詞的用法をめぐる－」『日本文芸研究』73-2 pp.1-27 (関西学院大学日本文学会)
- 辻本桜介 (2022 c) 「中古語の状態性述語を持つ引用構文について」『文学・語学』234 pp.37-48
- 葛清行 (2006) 「ミとミト」『国語国文』75-10 pp.45-62
- 鶴田洋子 (2018) 「表現としての引用」博士論文, 立教大学, 東京 (<https://rikkyo>).

- repo.nii.ac.jp/?action = repository_uri&item_id = 16006&file_id = 20&file_no = 2,
2019年6月2日参照)
- 鶴田洋子 (2019) 『『更級日記』における引用構文』『立教大学日本文学』121
pp.57-67
- 時枝誠記 (1954) 『日本文法 文語篇』岩波書店
- 中右実 (1973) 『日本語補文構造論』開拓社
- 中村幸弘 (2017) 『『古今和歌集』歌に見る「…とす」「…といふ」「…と思ふ」の
陳述の機能』『国学院雑誌』118-5 pp.53-70
- 仁科明 (2016) 「非引用の「～すと」-万葉集の場合-」第74回中部日本・日本
語学研究会発表資料
- 野田尚史 (2005) 「これからの文法論の焦点」『日本語学』24-4 pp.16-27
- 野田尚史 (2007) 「現代日本語の主張回避形式-「若いから か/だろう/と、断
られた」の「か」「だろう」「と」-」『日本語文法』7-1 pp.36-51
- 野田尚史 (2016) 「(書評) 藤田保幸著『引用研究史論-文法論としての日本語引
用表現研究の展開をめぐって-』(和泉書院 2014)」『日本語文法』16-1
pp.88-95
- 浜田泰彦 (2008) 「〈研究報告〉会話文におけるト書きとその文体に関する調査報
告」『語文』91 pp.50-59 (大阪大学国語国文学会)
- 西田直敏 (1993) 『日本文法の研究』和泉書院
- 橋本四郎 (1962) 「ミの形をめぐる問題」『万葉』42 pp.1-15
- 橋本四郎 (1978) 「ク語法とその周辺」阪倉篤義監修・浅見徹・橋本四郎編『論
集 日本文学・日本語 1 上代』角川書店 pp.351-367
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 藤田保幸 (2014) 『引用研究史論』和泉書院
- 藤田保幸 (2019) 『複合助詞の研究』和泉書院
- 本位田重美 (1984) 『日本文法講話』和泉書院
- 牧克己 (1980) 「「-を-み」の「み」について」『国語展望』56 pp.85-91 (尚学
図書)
- 松浦清美 (2000) 「形容詞におけるミ語尾の文法性-引用と評価-」『万葉』172
pp.21-33
- 松尾拾 (1969) 「と-格助詞〈古典語・現代語〉」松村明編『古典語現代語 助詞
助動詞詳説』学灯社
- 松尾拾 (1970) 「格助詞 を・に・へ・と」『国文学 解釈と鑑賞』35-13 pp.39-
41
- 松尾久美江 (1957) 「万葉集に於ける助詞「と」に就いて」『奈良女子大学国文学

- 会誌』2 pp.12-15
- 萬羽典子（1977）「会話文表現における引用形式の史的研究－『竹取物語』を中心として－」『文教大学国文』6 pp.47-56
- 三橋孝一（1955）「ク形式複叙法－いはく『 』といふ－の一考察」『国語』3-4 pp.52-61（東京教育大学国語国文学会）
- 森重敏（1950）「句格・言・第二係結－上代の辞「と、て」－」『国語国文』19-1 pp.1-36
- 森脇茂秀（2010）「比況表現と引用形式－竹取物語の双括引用をめぐって－」『語文研究』110 pp.50-64（九州大学国語国文学会）
- 山口康子（2000）『今昔物語集の文章研究－書きとめられた「ものがたり」－』おうふう
- 山口雄輔（1983）「狭衣物語における話主不在の引用形式－草子地論への試みとして－」『文教大学国文』12 pp.1-9
- 山口佳紀（1993 a）『古代日本文体史論考』有精堂出版
- 山口佳紀（1993 b）『古代日本語文法の成立の研究』（再版）有精堂出版
- 山崎良幸（1965）『日本語の文法機能に関する体系的研究』風間書房
- 吉田金彦（1973）『上代語助動詞の史的研究』明治書院
- 吉井健（1999）「「と思ふ」を句頭にもつ歌」『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』和泉書院 pp.641-658
- 吉井健（2020）「動詞終止形＋ト」を前件とし後件に引用動詞を持たない文の位置づけについて」青木博文・小柳智一・吉田永弘『日本語文法史研究5』ひつじ書房 pp.1-20
- Akiba, Katsue（1978）*A historical study of Japanese syntax*. Doctoral Dissertation, University of California, Los Angeles.
- Aston, William George.（1904）*A grammar of the Japanese written language*. Third edition. London: Luzac; Yokohama: Lane Crawford
- Chappell, Hilary.（2017）Say-complementizers in Sinitic languages. In Sybesma, Rint; Behr, Wolfgang; Gu, Yueguo; Handel, Zev; Huang, C.-T. James and Myers, James (eds.), *Encyclopedia of Chinese language and linguistics*, vol.3, 658-664. Leiden: Brill. ※出版前版（https://www.academia.edu/es/39848133/SAY_COMPLEMENTIZERS_IN_SINITIC_LANGUAGES, 2022年8月18日参照）に拠った。
- Frellesvig, Bjarke.（2001）A common Korean and Japanese copula, in *Journal of East Asian Linguistics*, 10(1) : 1-35
- Sansom, G. B.（1928）*An Historical Grammar of Japanese*. Oxford, The Clarendon Press.
- Vovin, Alexander（2008）*A descriptive and comparative grammar of western old*

Japanese. Part 2: Verbs, adjectives, adverbs, particles and conjunction,
Folkestone: Global Oriental.

Wrona, Janick. (2008) *The Old Japanese complement system: A synchronic and diachronic study*. London: Global Oriental.

[付記] 本稿は、令和4年度 JSPS 科研費（課題番号：22K00578）による研究成果の一部である。

（つじもと おうすけ・関西学院大学文学部助教）